真剣で格闘士（グラップラー）に恋しなさいッッ！

バランスのいい山本

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄　琢磨（くろがね　たくま）は強くなりたかった！

かつて仲間とかわした約束を、誓いを果たす為にだッ！

川神学園に通い、あらゆる強者との闘いの中、彼は一歩一歩『地上最強』の道を進んでいくッッ

バトルあり友情あり恋もあり!?

武士娘と格闘士が巻き起こす波乱万丈な物語が今、始まるッッッ

グラップラー刃牙シリーズのキャラをまじこいにぶちまけた俺得な二次創作です

注１：初投稿です

注２：格闘士達は武士娘に対しても一切容赦しません
注３：範馬ファミリーはでません。というか出せません。作者の文才的にそれでも『一向にかまわんッッ』という人であればよろしくどうぞ

目次

〜プロローグ〜 ―――― 1
人物紹介 ―――― 7
1　格闘士の日常編
〜人間力測定〜 ―――― 11
〜剣士と喧嘩師、時々松風〜 ―――― 23
〜だらけ部⇒渋川寮〜 ―――― 44
〜朝の鍛錬と登校風景〜 ―――― 58
〜クリス　来日〜 ―――― 79
〜ミス・ブシド―VSミス・キシド―〜 ―――― 93
〜その強さ、誰の為に〜 ―――― 121
〜空手道・神心会〜 ―――― 137
〜予感〜 ―――― 152
〜格闘士のとある休日〜 ―――― 169

～プロローグ～

『川神市』
関東地方の南に位置する政令指定都市
他の政令指定都市に比べ最も面積が小さいのにも関わらず人口は全国第９位
東京との近さからここ数十年で一気に近代化し、若者の街とまで言われるようになった
その証拠に駅前周辺では昼夜問わず人々が多く、小さいながらも立派な大都市として全国に名乗りを上げた
そんな川神市で今宵、不思議な現象を多くの人が目撃する
場所は川神駅の構内
東京から各駅停車の電車が到着した直後だった

ドドドドドドドドドドドドドドドド

「・・・・・・・・ん？」

「・・・な、何この音?」
それは日常生活ではあまりにも聞き慣れない音・・いや振動というべきか
小さく、かつかなり早いテンポで鳴り響く謎の地鳴り。それは電車が通過した時のものとは異なり、第一電車は停車したばかりである
1人、2人と気付き始め最後にはその場にいた通行人全員が足を止め互いに顔を見合わせてしまっていた
しかし、その原因を知る者はこの場にいなかった。そう・・・・・その時までは

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ!!!

「オワッ」
「キャアァァ」
「ひイイッ」

最初に気付いたのは駅構内の排水溝近くにいた人である
黒い物体が狭い排水溝から突如として溢れ出し、あっという間に床を黒く染め上げてしまった

ネズミだ。何百、何千ものネズミが突然大量発生し排水溝から一斉に現れたのだ
人々は理解した。先ほどの地鳴りはコイツ等の足音だったのだと
ネズミ達は決して立ち止まることなく構内を走り抜け、出口を通過し川神の夜へと消えていった
その時間、最初のネズミが出てきてからわずか1分の出来事である

「・・・・・・」

静かだった。構内のアナウンスは声色一つ変えることなく、いつも通りに流れている。だが、あまりの衝撃に誰1人として声が出せず、また歩き出せずにいた
今のは一体なんだったのか？
どれだけの数のネズミがいただろうか？
なぜ、あのネズミ達は地下から出てきたのだろうか？
あのネズミ達は一体どこへ行ったのだろうか？
いや、そもそもこれは現実なのか？夢なのか？
様々な疑問が頭をよぎるが、またしてもどれ1つとして答えがでなかった
彼が現れたのは、そんな時だった

それはまたしても不思議な光景であった
改札口から出てきたのは、１人の若い青年である
身長は１７０後半。おそらく学生だろうか服装は市内にある川神学園の制服だ
先程、ここで起こった出来事を知らないごく普通の青年はスポーツバックを肩に掛け、何食わぬ顔で歩いているだけである
なのにその場にいた者達は老若男女問わず、一様に視線を彼に向けていた
ただ歩いているだけなのに・・・・・・
ーー
例えば、広大なサバンナでまだ幼いインパラが一頭で行動していたとする
そんな彼が不運にも出くわしたのは・・・・・若きチーター
最高速度時速１１０キロ
単独で行うにも関わらず、狩りの成功率はじつに5割！
サバンナにおける地上最速の肉食獣である
さア、逃げるんだインパラ君！
お得意のジグザグ走行でこの窮地を脱するんだッツ

だが・・・・インパラは逃走ないのである
我が身に起こった悲運、絶望的状況に全身がすくみ一歩も動けなくなるのだ
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
今、川神で全く同じ現象が起こっていた
一見、普通の高校生に見える青年の持つ一般人とは比較にならない・・・・桁違いな
何か
戦闘力?
精神力?
身体能力?
存在感?
あるいはそれら全て?
見ず知らずの青年に人々は皆、動きを奪われていた
名も知らない・・・・今、初めて出逢う通り過ぎただけの青年
青年に関する情報を1つも持たないまま、知識よりも先に60兆の細胞が即座に反応
した。それと同時にそこにいる誰もが確信した
（この子だ!!）

地震や津波など大きな自然災害の前触れに家のネズミが逃げ出すことがあるという。まさか、彼等が逃げ出した原因って・・・・・

（この子なら納得だ・・・！）

皆の答えが合致した頃、青年はすでに川神の闇夜に消えていった

翌日の４月２３日、朝刊の新聞は『川神駅構内にネズミが大量発生』と小さく報道した。だが、その直後に同じ場所を通った１人の青年がその原因であった事はその新聞記者達は知らない

人物紹介

人物紹介

『俺が闘う目的、地上最強を目指す理由・・・・・・全ての答えは絆にある』

鉄　琢磨（くろがね　たくま）

身長　１７６センチ

血液型　Ａ型

誕生日　８月１５日　しし座

一人称　俺

あだ名　タクマ　クロ先輩　ボス

武器　全身

職業　川神学園２ーＳ在籍

家庭　父母共に健在　祖父に陣内、姉に乙女がいる

現在、親不孝通りにある平屋にクッキーと２人（？）暮らし

好きな食べ物　おむすび

好きな飲み物　コーラ（炭酸抜き）

趣味　学園の依頼を受ける
特技　サッカー
大切なもの　絆
苦手なもの　雷
尊敬する人　鉄　陣内

本作の主人公
榊原小雪、葵冬馬、井上準、九鬼英雄、忍足あずみの５人（＋クッキー）で作られた仲良しグループのリーダー的存在
生まれは東京の柴又であるが、とある理由で小学校５年生の時に祖父の知人に預けられて以来、川神で育った。今ではほぼ自立しており、親不孝通りの一角にあったボロボロの平屋を購入、リフォームしクッキーと一緒に生活している
川神学園の学生である傍ら、『地上最強の男』を目指す生粋の格闘士（グラップラー）
現在とある闘技場の最年少王者に君臨し続けており、時折足を運んでは挑戦者と決闘している。日常の中ではその力を無闇に使うことはなく、依頼を解決したり、だらけ部でまったりしたりと気ままに学園生活を満喫しているが、学園行事では手を抜かず与え

られた仕事はしっかりこなす
実は川神百代や京極彦一らと同い年だが2年の時、出席日数が足らず進級出来なかった過去がある
戦闘スタイルは幼少期から己の身体に叩き込んだ格闘経験による我流の格闘術
素手で戦う以外ファイトスタイルや技に対するこだわりはなく空手や柔術、古武術など多種多様な格闘技を駆使する
姉である乙女と同じく手先が不器用で料理は苦手。唯一おむすびを作ることができ、その形は姉よりも綺麗である
機械も携帯が使える程度で電気製品の扱いは殆どクッキーに任せっきり
また過去のとある体験が原因で重度の雷恐怖症である

《作者コメント》
知っている人は知っている『つよきす』に登場したヒロイン鉄　乙女の実弟。弟キャラでありながら立ち絵もなければボイスもないという不遇の扱いだった彼を『真剣で私に恋しなさい！』で主人公として昇格させてみた結果がこれだよ！
原作では得意のサッカーで北海道の名門校に推薦入学している設定をがっつり改変。

それに合わせて戦闘力も『地元の喧嘩では負けなし』レベルから『壁超え』レベルにまで底上げ。ただし、肉体的闘争力のみでビームやブラックホールは出せません。予定としては話が進むにつれてまだまだ強くなる・・・・ハズ

1　格闘士の日常編
～人間力測定～

４月２３日（木）

外は暖かな陽気、春の息吹に緑が鮮やかに色づき始め、桜前線が通り過ぎた４月の下旬。川神学園のグラウンドに体操着とジャージを着た２―Ｓ組の男子生徒達が集められ、生徒達の前には体育教師のルー・イーが立っている

「これよりＳ組男子の人間力測定を実施するヨ！　あとが控えているから速やかに行うようにネ」

グラウンドの隅々届くようなルーの声にＳ組男子陣は威勢のいい声を上げ、最初の種目場所へと向かって行く

「アー、その前に鉄　琢磨はここにいるかイ？」

「……あ、俺です」

「少しいいかナ？　他のみんなはしっかり準備体操をしてから始めるようニ」

琢磨を残し他の生徒は各自ストレッチを開始し、琢磨は掛け足でルーのもとへ向かう

「わざわざ呼び出してすまないネ」

「いえ……で、どうかしましたか?」

「実は各クラスの過去の測定記録を見てたんだけド、どうやら君だけ過去2回とも受けてないみたいだネ。去年が盲腸で一昨年はインフルエンザ……特に去年は体調不良が多かったようだから、少し心配してたんだヨ。で、今日は大丈夫かナ?」

「はい、調子は良好気分は上々。今日は最高のコンディションで臨む事ができます。過去2回分の記録も出す気持ちでいきますから」

「オーーそれは何よりダ。それじゃあ、いい結果を期待してるヨ!」

ルーは琢磨の肩をポンポンと叩くとその場を後にした

琢磨も皆がいる場所へ戻る。と、ふとある事に気付いた

(考えてみたら……体力測定とかって、生まれて初めてなんだよなァ)

〜短距離走〜

出走順が自分に回ってきた琢磨は着ていたジャージを脱ぎ、他の出走者と共にスタートラインに立つ。その姿に一部生徒達がざわつき始める

（な、なんだよあの身体？）

（クスリでもやってんじゃネェのか？）

（つか、全身キズだらけじゃん！３年のアイツとソックリだぜ）

（ッッ……これが体調不良を理由に欠席していた人間の身体だというのかネ）

それは、武術の総本山『川神院』で師範代を務めるルーでさえも目を見張るものだった

腕や脚、首に掛けての身体の各部位の筋肉が大きく、太く発達している。それだけならこの学園にもそういう体格の生徒は何名かいる。だが体操着の半そでや短パンから伸びる手足には夥しいほどの傷、疵、創。一言で言うなら『異質』であった

ルーにはすぐに分かった

（この琢磨という子、とても強イッッ。総代がおっしゃっていたことは紛れもない事実でしたカ　）

かつて、半世紀前の大戦時、存亡の危機に陥った国家を我が身１つで守り抜き、もし

も攻勢に転じていれば世界に日の丸の旗を掲げたであろうと称された現代に生きる伝説の漢の実孫

　それでいて彼は虚勢を張らず、威圧をせず、かと言って自惚れることもない。今持つ己の度量、実力をそのまま身体へ出るにまかせている。その自然体のあるがままな姿は、逆に個性豊かな生徒達の中に混じってしまうと結果的に彼がこの学園で目立たなくなっている。今までルー自身琢磨の事をそれ程気にも留めていなかった一番の理由はそこにあった

　琢磨に対する評価を改めたルーは自らの身体の奥底から込み上がる武人としての心を必死に抑えていた

（やはり彼が鉄の血を引く人間というのも納得だネ。これは世界新記録も夢じゃないヨッッ）

　周りが密かに騒然となっている中、渦中の男である琢磨は遠く先にあるゴールラインを見据えている

（それじゃあ見せてもらおうかな、鉄家の一族の性能とやらヲッッ）

　手足をグリグリと回し完全にリラックスしている彼を見てルーも冷静さを取り戻し、自分の職務に専念することにした

「準備はいいかイ？　位置について、ヨーイ……ドン!!」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

　グラウンド、体育館でそれぞれ人間力測定を終えた生徒達は速やかに教室へ戻り、全員が終わるまでの間は教室で自習という名の自由時間になる。ここＳ組でもそれは例外ではない。むしろ彼等にとってはこちらの時間のほうが貴重である

　Ｓ組は成績優秀者で編成されたいわばエリートクラス。学力成績の順位が５０位を下回ると即刻他のクラスに移ってしまうというかなりシビアな環境である。因みにＳ組の在籍資格を失い脱落することをこの学園では俗にＳ落ちと呼ぶ

　制服に着替え終えたＳ組生徒達は机に座り早速参考書をカバンから取り出し黙々と自習に入る

　琢磨も同様に机に座ったものの、椅子に背中を持たれ掛けながら天井を見上げてしまっていた。そんな彼に前の席で先に本を読んでいたスキンヘッドの親友『井上　準』が声を掛ける

「よっ、お疲れさんボス。で、あの後どうだったんだよ結果のほうは？」

「大丈夫だ、問題……ない」

「その様子だと、最後まで新記録更新しちまったみてーだなオイ」
「なぁ準、俺って運動音痴なのかな……」
「つか、ただヤル気が空回りし過ぎたって感じだけどな」
それにしてもなぁ、とつぶやきながら琢磨は机に突っ伏してしまう
琢磨の測定結果を簡潔に言い表してしまえば『散々な結果』に尽きる
身長や体重などの身体の測定記録は当然測れたが、運動方面になると準の言葉通り新記録のオンパレードであった
・・・・ただし、『最低』の2文字が最初に付くが
・短距離走
スタートの合図とほぼ同時にスターターが損壊するほどの破壊的ロケットスタートのままゴールするも、タイムを計っていた生徒には気付いてもらえず結果『記録なし』
・ソフトボール投げ
投げたはいいものの、学園敷地内を大幅に超えてしまい結果『記録なし』
・走り幅跳び
測る場所である砂場を飛び越えてしまい、着地地点を探すことができずに結果『記録なし』
・懸垂

数え始めた直後、鉄棒を壊してしまい同じく『記録なし』

　その後も琢磨は過去2年の遅れを取り戻そうと各種目全力で取り組むも、そのどれもが同じ結果に終えてしまった。ルーはあまりの記録にいたたまれない気持ちになり、やり直しを琢磨に提案した。が、

「他のみんなが一度きりの測定を一瞬一瞬全力でやっているのだから自分がそれを理由にもう一度やり直すのは間違っている。このままで一向に構いませんッッ」

　と一蹴し『男子の部全種目記録なし』という前代未聞の新記録を樹立したまま教室に戻り現在にいたる

「しかしボスも人がいいと言うか頑固というか、本当ならどれもギネスブック認定ものだぜアレ」

「かもな。けど俺が目指すのはトップアスリートじゃないし、逆にあれぐらいの事が出来なきゃ俺の目標なんざ夢のまた夢だ。ま、記録は残るに越したことはないかもしれないがな」

「相変わらず切り替えの早いことで。ボスの場合は記録よりも記憶に残ったケド」

　そういいながら準はペラペラと本を読み進める。文庫本ではなく、よく見ればマンガの単行本だ

チラリと本のタイトルが見えた琢磨は思わずため息をついてしまう
「そういうお前も相変わらずの趣向じゃねえか。また性懲りもなくそんなもん堂々と読みやがって」
「失敬な！この『制圧！タコ少女』の魅力がボスには伝わらんのですかッッ」
「タイトルにタコが入っててヒロインの台詞の語尾がゲソじゃ魅力どころか説得力も皆無だ」
先程の物腰柔らかそうな雰囲気を一変させ琢磨に詰め寄る準
この男、小さく可愛い女の子を愛でることに生きがいを感じる紳士。ようするにロリコンである
「なんじゃなんじゃ、山猿共のクラスが騒々しいかと思ったらお主らの声であったか」
「ウェーイ。タクマ、疲れた僕の身体にマシュマロを補給するのだー」
そんな取り留めのない話をしている琢磨達のそばにやってきたのは、高価な着物を見事に着こなした日本三大名家に名を連ねる不死川家のご息女『不死川　心』と純白のロングヘアーにルビーのような赤い瞳が特徴的な琢磨の幼馴染『榊原小雪』の測定を終え

て教室に戻ってきたばかりの２人だ
「お疲れユキ、不死川。今日のマシュマロはイチゴ味な」
「不死川もどうだ？こっちにペロペロキャンディーがあるけど」
琢磨はおもむろに机の中からマシュマロを取り出し小雪に
準もどこからともなく大きなキャンディーを取り出し心に差し出す
「いらぬわ！・というか本当に持ってるあたりドン引きなのじゃ……」
身長１５８センチと小柄な体型の心はロリコンの準にとってはギリ射程外らしい。
彼曰く「あと２年早く会いたかったぜ……」と心底残念そうだった
琢磨の膝に座った小雪は心とは逆にマシュマロを素直に受け取ると美味しそうにマシュマロを頬張り始める
「それはそうと聞いたぞ鉄、お主此度の測定でことごとく失格だったそうではないか。常識外れというのも不便なものよのぅ。ニョホホ」
「げ、もう広まってるのかよ。やれやれ、とうとう常識が俺に追いついて来なくなる日が来るとはな・・・世知辛い世の中になったもんだなユキ」
「んー？」
琢磨は目の前にある小雪の頭に手を置くと髪を乱さないよう優しく撫でる
マシュマロを口に運びながら膝の上で気持ち良さそうに目を細める小雪の姿は日溜

まりでまどろむ子猫のようで、その様子を傍から見れば爆発しろ！と叫ばれても何の違和感がない美男美女のカップルなのだが、２人は別に付き合っている訳ではなく、これはスキンシップ。琢磨によるコミュニケーションの一環だ

「都合の良い解釈をするでないわ。全く、川神や九鬼と同じでお主の常識はずれも甚だしいのじゃ。蛮勇も過ぎればＦ組の山猿風情と大して変わらぬぞ」

「蛮勇か……良いねぇその響き、嫌いじゃない。つかよ、着物を着て牛車に乗りながら登校してくる奴に言われたくはないな」

「な、なんじゃと!?」

「まぁ学園に多額の寄付で許可をもらったとはいえな、英雄やあずみと大して変わらねぇぞお前も」

「そうそう。だから友達出来ないんだよねー」

「こらユキ、それは言わないお約束だろ。結構本人気にしてるんだから」

「そうだぞ、もし本人が聞いてたらどうすんだよ。なぁ不死川？」

「此方に振るでない！もうよいわ、このうつけが！」

　そういって心はプンスカと怒りながら席に戻ってしまう。と同時に昼食と昼休みの時間を伝えるチャイムが学園全体に鳴り響く。自習していたクラスメイト達もそれぞれ昼食をとるために席を立ち始め、心も机から高級料亭に出てきそうな重箱を取り出

す。しかし他の生徒が友達と一緒に食べてる中、周りには誰もおらず1人でいる心の背中は少し寂しそうに琢磨は思えた
「……なぁ準。お前今日弁当か？」
「おう、若には悪いが学校に来れなかった分ちょっと豪勢にしたぜ。もちろんユキの弁当もな」
「おおー、毎日欠かさないハゲにはそれなりに感謝するのだ」
「それなりって……まぁいんですけどね、俺紳士ですから」
「そうか、じゃあ悪ィけどさ」
「分かってるって。俺とユキにまかせろ。な、ユキ？」
「うん、タクマの為なら僕なんでもするよ！」
　琢磨の視線を読み取った準と小雪がすかさず答える。長年の付き合いである彼らだからこそ最後まで言わずとも通じ合えるものがある。ここにいない残りの仲間3人にも当然言えることだ
「ヘイヘーイ不死川、いつ見ても美味そうな弁当だなオイ。ちょっとこのエビフライと伊勢えび交換しようぜ？」
「あーズルイぞハゲ、僕もマシュマロと交換したいのだ」
「にょわわ!?　勝手に此方の弁当を漁るでない！　小雪に関してはもはやおかずではな

いのじゃ！」

ギャーギャーと一気に騒がしくなるも一緒に昼食を食べる相手ができて、どこか心の顔には笑顔が垣間見えるようになり琢磨は内心ホッとした。同じ学年になり心と会話をする機会が出てきた琢磨だが、一番気になっていたのが彼女のコミュニケーション能力の低さである。蝶よ花よと育てられたが為か彼女の選民思想はガッチガチで家柄で人を見下してしまいがちになり、それが友達のいない大きな要因となっている

そんな彼女の事を仲間達から聞き、ここ最近は積極的に心に話しかけるよう琢磨達は心掛けている。それが年上としての優しさ、思いやりから来るのかそれとも過去の自分を重ねた故の同情からくるのかは本人にも分からなかった

「（さっきイジリ過ぎた事もあるし、ここはユキ達に任せるとしよう。さて、弁当ナシの俺は昼飯どうすっかな～）」

購買で済ませるか食堂に行くかの選択肢に頭を切り替え、琢磨は教室を後にした

～剣士と喧嘩師、時々松風～

今まさに川神学園は戦場と化していた。

チャイムが鳴ったや否やそれぞれの教室を駆け出し、飛び降りるかのように階段を走り、並走する競争相手を押しのけ、我先にと購買へと向かう生徒達……いつもの昼食風景である

ここの購買は味もさることながら値段も良心的。昼時となれば生徒達がこぞって集うまさに激戦区。その苛烈さから、売り側もまとめ買いをさせないように一度で買える個数を現在決めており、スタートを出遅れてしまえば焼きそばパンやカツサンドなどの人気商品はあっという間に完売済みとなってしまう

４時限目の授業の後半になるにつれて購買組はそわそわし始め、今か今かとその時（チャイム）を待っているのだ

そんな生徒達に追い越されつつ、琢磨は自分のペースで足を進める

普段の彼は無駄な浪費を抑える為に弁当――――――といっても中の具がそれぞれ違うおにぎりを数個――――を持参し、それで平日の昼食を済ましているのだが、今日は朝の起床時にドタバタしたこともあり弁当を持って来ていない。ならば購買に行って腹を満たそうかとも思ったが、午前中の人間力測定の際、全力で身体を動かしこともありいつも以上に腹をすかしている。もはや購買のパンなどで自分の胃袋が満足する状態でもなかった

……とまぁ要約すれば『久々に今日はがっつり食いたい気分』になったので現在食堂に向かっている

「(今日はカレーにするか……いや、カツ丼もいいな……あぁ、ラーメンも捨てがたいぜ)」

そんなことを頭に思いつつ琢磨は食堂がある一階へと下り、目的地に進む

と、食堂の入口を視界に捉えたところで1人の女子生徒が彼の目に止まった

「なんだぁ……あの子?……ッッ!」

食堂の入口付近を行ったり来たりとおろおろしている彼女は上履きの色からおそらく一年生。端整な顔立ちと首元で2つに分けて纏められた長く艶のある黒髪、そして袋に仕舞われた刀らしき物を肌身離さず持ち歩いている

おどおどしつつ辺りをチラチラと窺うその挙動不審ともいえる姿は、もし今いるこの場所が川神学園の食堂ではなく、一般のスーパーであったら、即刻万引きGメンのマーク対象になっているだろう。いや、刀を所持している時点で警察に通報されるのがオチだろうが……

さらに、彼女の不審者ぶりにより一層拍車をかけているのは、手の中に置かれている馬の携帯ストラップに話しかけ、挙句の果てにはそのストラップと腹話術で強引に会話を成立させていること

いくら1年の可愛い後輩が困っているだろうなと分かっていても、彼女にデカデカと貼られている変人のレッテルは絶対に関わるべきではないと決定に至らせ、事実、彼女を中心とした一定の空間はまるで結界が張られているかのように人が避けて通ってい
た

しかし、琢磨が彼女から感じ取っていたのは全く別物。それは彼女を視界の中心に捉えた瞬間から始まっていた

才能故か・・・半生を強くなることだけに捧げ続けた永きに渡る格闘士生活故か・・・或いはその両方・・・予感以上の確かなもの

女性としての魅力を損なうことなく作られたその引き締まった身体つき

必要以上に己の間合いへ踏み込むことを決して許さず、一分の隙もないその足運び

なのに、弱々しい皮へと見事に馴染ませ、周りに悟られないその技量

「(うん、間違いない……あの娘……強ェ)」

琢磨が声を掛ける理由・・・最早、帯刀していようがストラップと話してようが関係なく

刹那、脳内にに飛び込んだ彼女の僅かな情報だけで充分だった

「おーい、そこの1年。さっきから何してんだ?」

「はぅあ!? ははははい!私ですか!?」

「おっーと、これはまさかのバックアタックだ！まゆっちは驚き戸惑ってる！　だが安心しな、オラがいる限りまゆっちには指一本触れさせねぇぜ！」

　ちょうど彼女が背を向けていた時に声を掛けたのが不味かったか、本人はテンパり、馬のストラップは興奮状態になっている。・・・って腹話術出来てるならテンパってはいないのではないか？

「まぁ取りあえず落ち着け、両方落ち着け。昼時に飯も食わずこんな場所でおろおろして一体どうした？困ってるなら助けてやるが」
「あ、あああの、えとですね……」
「だいじょぶだ～まゆっち、まゆっちならやれば出来る！　ここは慌てず、まずは深呼吸だ！」
「そ、そうですね松風。ここはまず息を整えましょう……ヒー、ヒー、フー。ヒー、ヒー、フー」
「ラマーズ呼吸法、定番を外さないとは中々やるな。で、大丈夫か？」
「……はい、お待たせしてスイマセンでした」

呼吸を整え、冷静になった彼女とようやくまともな会話が出来る状態になる
先程まで彼女の潜在しているであろう能力を感じ、勝手に舞い上がっていた自分を思わずぶん殴りたくなる衝動を抑え、琢磨は本題に入る

「そうだな……まず始めに名前から聞こうか。俺は2年S組の鉄　琢磨。君は？」
「1年C組　黛　由紀江と申します。そしてこちらは松風。はい松風、失礼のないように」
「オッス、オッス、オラ松風、まゆっちの友達！　ヨロシクっす先輩！」
「おう、ヨロシクな2人とも。で、何してたんだこんな所で？」
「あ、あのですね。昼食を食べにここまで来たのはいいんですが……実は私、食堂が初めてでして……」
「学食のゲット方法が分からない&あまりの人の多さでまゆっちの頭はパニック寸前だったんだぜ～」

黛と松風の絶妙な会話まわしで彼女の抱えていた大まかな問題を理解した琢磨
入学当時の学園案内で聞いているはずであろうことを今更・・・・とは心の中だけに留めておく

「そうか、ならついてきな。俺が学食の買い方教えてやるよ」
「いいいいいえいえそんな！　わざわざ先輩のお時間をとらせる訳には……」
「いや別にいいって。丁度俺も学食にしようと思ってたし。というよりもう俺腹減っちゃてさ、早く飯食いたい訳よ。つー事で拒否権はナシ！　このまま連行な」
「え？……あわわわわわ!?」

黛の手を掴んだや否や押し寄せる人波をかき分けながら、琢磨と黛は食堂へと足を踏み入れた

――

ここ川神学園の食堂には券売機が置いてあり、そこから自分の食べたいものを選んだら必要な分の金額を投入して食券を購入。それを終えたらカウンターにいる食堂のおばちゃんに食券を渡し、料理が出てくるまで待つ。これがこの学園で学食を食べれるまでの大まかな流れである

わざわざ説明するのもどうかと思うしょうもない内容だが、黛はその教えた内容1つ1つをしっかりと目で見て体で体感しメモをしっかりとっていた。彼女の終始生真面目すぎる行動に琢磨は思わず苦笑しながらもその姿を見守り、しばらくして2人は待ちに待った昼食を手にいれた

黛が頼んだのはざる蕎麦。琢磨は悩みに悩んだ結果カレー、カツ丼、ラーメンの3つを食べる事に

「いいのか黛？　わざわざ俺を待たずに先食っててもよかったのに」
「はい、ここまでして下さった先輩を差し置いて席に着くのもどうかと思いまして……」
「変に気を遣わなくてもいいぜ？　まぁこの時間帯じゃあ座れる席もほとんどないし、今日は俺の特等席に案内するよ」
「と、特等席……ですか？」
「スゲー、ＶＩＰ席持ちとか超リッチ。　先輩もしかして大物なのかい？」
「そんな身分じゃないっての。まぁ、一緒にくれば空いてる理由も分かるから。ほら、こっちこっち」

琢磨に手招きされ、黛もその背中を追う

「（――――――先輩の言う特等席とは一体どんな席なのでしょうか？）」

しばらく談笑しつつ進んでいると不意に先導していた琢磨が立ち止まり黛を前に呼ぶ

「な？　あそこが俺の特等席になるわけだ」

「え……あ、あああああそこですか!?」

指さす先に目をやると確かに空いた席が存在していた

だが、どうもおかしい。現に自分達よりも先に来たばかりの生徒がその場所を通っても座ろうとせず、別のテーブルの席を探し始めている

学生数も多く人気のあるこの食堂。しかし、その席がある一帯を最初から存在していないものと皆が認識しているようにも思えた

だが、その理由は明白であったし納得もいく

ちょうどその一帯の中心に位置する席にのみ1人の学生が食事をとっている

学生？・・・・・・・・・・・いや違う。学生服を着た猛獣だッ

猛獣？・・・・・・・・・・・いや違うッ！そんな生易しいものじゃないッッ！

猛獣以上の侠（おとこ）が――――――――そこにいたッッ

座っていはいるものの、その身長は推定１９０以上

その体格と身長から考えうる体重は最低でも１５０キロを上回る

第一印象は肥満（デブ）にも思えたが、眼を凝らせばそれが一種の擬態である事に気付く

その身体を纏う特注であろう学生服は、彼の筋量――――尋常ではない体型を隠していた

文句のつけようのない・・・・巨漢である

うかつな質問を一切はさませないその刃物のような鋭い眼光

そして何より特筆すべきは、その侠の顔に刻まれた――――――――――疵

向き合う者を怯ませずにはおかぬ、深く、大きな――――――――――切創

左額から右頬に向けて１つ

右顳顬（こめかみ）から口元を縦断し左顎に向けて1つ・・・・・・

その侠――――――名を『花山　薫』という

「オーイ、花山！　今日もお前学食か。隣、座っていいか？」

「くっくく鉄先輩!?」

琢磨は無警戒のまま花山に近づきあまつさえタメ口で馴れ馴れしく話しかける

黛からしてみれば、その人物は明らかに危険な香りの根源であり、気が気ではなかった

「……琢磨か。オメェが食堂に女連れて来るとはな」

「ハッ、違ェーよ。さっき知り合ったばかりの後輩だ。な、コイツも一緒でいいだろ？」

「勝手にしろ……。別に俺の席じゃあねぇんだ……」

縁なしの眼鏡から覗かせる視線とは裏腹に花山は特に何も言わず自分で頼んだであ

ろうオムライスを口に運ぶ。その手に持つスプーンは、花山の風格とその巨拳で爪楊枝かと錯覚させる

「そんな顔すんなって黛。大丈夫、花山はこう見えて優しいから。ほら、座った座った」

「は、はい……し、しし失礼しますッ！」

花山の隣へ座った琢磨に促された黛は覚悟を決めたのか、礼儀正しく頭を下げ2人の向かいの席に着く

それと同時に、花山に負けず劣らずのメンチビームをぶつけてきた

「(こッ……怯え～～～。さっきから話してて時折見たけど、やっぱ凄い気迫だな)」

「(緊張……か。売られてる訳でもねェか)」

一見すれば大人しく財布を渡しかねないほどの黛の睨みだが、琢磨は会話の中で何度か見たことによる慣れで、初見の花山は数々の修羅場をくぐり抜けたその経験から一瞬で彼女に悪意がないことを見抜き、お互いその事に関しては指摘をせずに食べ始める

「つか、またオムライスにメロンソーダかよ。ほんと好きなんだなそれ」
「うめェ。それ以外、鉄　琢磨には――――理由が……必要か？」
「必要ねェなそりゃ。今度、俺も頼んでみるか。オムライス」
「あ、あの……2人はどういった繋がりなんでしょうか？」
「ん、俺と花山か？　元クラスメイトの友達（ダチ）だ。ま、今はコイツが先輩だけど」
「友達ですか……凄く、羨ましいです」
「確か『友達１００人計画』だっけ？　入学して実行からもう1ヶ月位は経つけど、未だに0と」
「は、はい。色々と試してはいるのですが……失敗の連続ばかりで。もしも先輩から何かアドバイスがあれば是非ッ」
「厚かましいお願いだけどさ、こうして相談できる人も今までいなかったんだよね。だからここは先輩にひとつ、オラに免じて1人迷えるまゆっちにどうか救いの手をッ、友達作りのご指導をッッ」
「アドバイスって言ってもねぇ……」

　チラリと琢磨が花山に目線を送ると案の定、突如として喋りだした謎の携帯ストラップに興味を示している

顔の表情に変化は殆ど見られないが付き合いが長い琢磨には分かる。・・・・彼がチョット驚いていたことが

「まずその松風という付喪神が曲者だ――――話相手そのものが距離を取っちまう」
「松風って……アレか……？」
「そう、あの馬の携帯ストラップだ花山。なんでも付喪神が宿ってるとか」
「……腹話術じゃｎ」
「いや、付喪神だ。言いたい事は分かるが、とりあえず今はそれで納得してくれ」
「そうか、付喪神か……面白ェ」
そして何故かウケていた
松風に対してか、それとも黛に対してかは定かではないが・・・

「手始めにそのストラップとの会話を……って無理か。出来ませんって顔してるぜ」
「す、スイマセン。松風は私の大切な友達ですので、ハイそうですか……とはとてもじゃありませんが」
「まゆっち……ホントいい娘やね～。もしもオラが人間の金持ちだったら、カードの暗証番号なんてペロりと教えるぐらいアツく口説いてるぜ」

「もう、やめて下さいよ松風ったら」
「……となるとだ、一般人は諦めたほうがいいな」
「ええっ!?　そ、それでは一大決心して地元から出てきた私の覚悟が――――」

『一般人』じゃなく……『武人』とならあるいは、なぁ?」

「……ッッ!!」

彼女でも感じ取れるように琢磨は闘気を軽くぶつける
黛は一瞬身体を震わせた後、横に立て掛けていた刀袋にすかさず手を伸ばす

「やっぱりな。今の僅かな気の変化を見逃さないとは……流石は北陸より来たりし『剣聖』の娘だ」
「剣聖……なるほど、オメェがあの黛か」
「え、私の父を知っているんですか?」

「そりゃあね、武の世界に身を置く人間なら知ってて当然な位のビックネームだ。だけど、なんで花山まで知ってるんだ?」
「俺達の所は日本刀なんざ目につく場所にある……刀を扱う連中がいる以上、聞かずとも耳に入る」
「へぇ、世界は違えど一目置かれてるのかあの人。スゲーな人間国宝」
「そ、そうでしたか……此処にまで父上を知る方がいるなんて。これでは地元と大して変わりありません」

おそらく父親の名があまり知られていない新天地を目指してこの川神学園に入学する決断を下したのだろう
黛はその現実を目の当たりにししょんぼりしていた

「武道が盛んなこの学校だからさ、もう割り切って武人として馬が合う人と仲良くしてみれば?」
「そ、それだと多分、みなさんが怖がると思うから……」
「闘いの中で生まれる絆もあると思うけどな〜〜俺は」
「争いごとは出来れば避けたいです。……私は友達が欲しいだけですので」

「なるほど、だからS組じゃなくてC組にしたのか」
「はい。競争が主なクラスとお聞きしましたので」
「そりゃあまた……難儀な性格してるな君も」
「うぅ、お恥ずかしい限りです」
「そんなまゆっちに代わってオラが聞くけどさ～、先輩方はそういう拳で語り合った仲なのかい？」

意気消沈してしまった黛のバトンを受け取った松風が琢磨と花山に尋ねる
本体が落ち込んでいるのにこの馬だけ異様に饒舌なこのギャップ。もはや別の個体として男2人は認識しつつあった

「おうよ、やったぜド派手にな。仕舞には九鬼が介入する羽目になったけな確か」
「あれからもう3年……か」
「ス、スゲー。予想の斜め上を行く展開にオラもびっくりだ」
「喧嘩の理由はチョットここじゃ言えないけどさ、今じゃこうして仲良くしてるし、友達になるきっかけなんてその時々の自分の行動次第だと俺は思うぜ？」
「自分の行動……」

「そ、友達が欲しいならまず必要なことはなんだ？　ソイツと仲良くしたいと思ったらまず何をする？　初対面だろうが昔喧嘩をした相手だろうがそれは変わらねぇ……」

ラーメンのスープを一気に飲み干した琢磨が黛の瞳を真っすぐ見つめる

「自己紹介、そして『友達になって下さい！』の言葉、誠意だ。それさえ伝えられれば充分。相手が自分の思っていたような良い奴なら尚更な」

武人だろうが、一般人だろうがそいつは変わらねぇよ――――と最後に付けたし、コップに注がれた水を飲む

と、同時に食事を済ませた花山がおもむろに席を立つ

「ッ！……あ、あの！」

黛の声に水を飲み干した琢磨と食べ終わった皿とコップを持ち、立ち去ろうとする花山が目を向ける

「どうしかしたか黛？」

「………なんだ？」
「あ、あのえと……改めまして自己紹介を。い、1年C組　黛　由紀江と申します」
一息つき、意を決した黛が立ち上がる
「も、もしよろしければ……わ、私と……と、友達になってくれませんか？」
・・・・・・・・・・・・・・
唐突な友達申請に琢磨と花山は思わず顔を見合わせる
そして、ほぼ同時にフッと鼻で笑ってしまう
「何を言うかと思えば………さっきの話、聞いていたのか？」
「え？　ええ？」
「ここまで色んな事を話し合えたんだ。俺たちはとっくに『友達』だろ？　もう俺達の間にその言葉はいらないはずだぜ」

「ツッ！……鉄……せんぱい……」
「だろ？　花山の大将？」
花山はおもむろに胸のポケットから一枚の紙を取り出すと黛の机の前にそっと置いた
「何時でもいい……連絡しろ」
それだけを言い残し、花山はその場から去って行った
置かれた紙に書かれていたこと・・・・携帯番号、住所、そして
『二代目　花山組　組長　花山　薫』それは彼本人の名刺だった
「あ……あの」
「さてと、俺も連絡交換を……ってどうした黛？」
「私、じ、実はまだ携帯を持っていません。その、今まで友達が1人もいませんでしたの

で・・・・・」
「真剣(マジ)か……全く、最初から最後まで困ったお友達だな」
「あうぅぅ……」
琢磨は微笑しながらそんな彼女の頭を優しく撫でる
撫でられた黛はしばらくの間、顔を朱に染めて琢磨を見上げていた

～だらけ部⇒渋川寮～

「……で？　結局、その1年とは連絡交換したのか？」
「いや、今日は流石に無理だったが今度、一緒に携帯を買いに行く約束だけしといた」
「早速後輩とデートの約束とは、お前さんも結構大胆だなオイ」
「デートって……ただの付き添いだぜ？　そうでもしないと一向に連絡取れないだろ。それとも花山に行かせたほうがよかったか？」
「まぁ、それもそうだな。花山と2人で買い物とか、オジサンも遠慮したいぜ」
「俺的にはヒゲ先生と花山がその後、どんな買い物をするのか気になるけど……なッ」
「あ……そうきたかお前、さて、それじゃあオジサンの次の一手は……」

午後の授業をいつものように消化した放課後、帰り支度をして下校する生徒も多い中、いまだに琢磨は学園内にいた。放課後に残る生徒の大半は部活動をしている人が多くグラウンドやそれぞれ自分達部活で使用される部屋で日々己の技を磨き、体力を養っている

琢磨が現在いる場所は室内一面に畳が敷かれている第二茶道室。

だが、彼は茶道部に入っていない
ならば、彼は今何をしているのか？
将棋だ。堂々と茶道室の真ん中に陣取り、おっさんと将棋をしている
なら彼は将棋部の人間か？
違う、将棋部にも所属していない
じゃあここは一体何部の部屋なんだ？　と聞かれれば、ここにいる2人は迷わずこう答えるだろう

『だらけ部』と

そう、ここは学園非公式部活動。現在将棋を指している琢磨と2―S組の担任教師『宇佐美　巨人』そしてあともう1人の男子生徒でダラダラとした時間を過ごす聖域なのである

「ああ、そういえばさ」

将棋盤を舐めるように眺めながら次の一手を考えてた巨人が顔を上げる

「鉄、今日の人間力測定の件なんだけどよ……」
「それ以上何も言うな。反省はしているが後悔はしていない」
「違う違う、まぁ最後までオジサンの話を聞けや」

自分の担任から切り出された話題に深いため息をつくと、琢磨はそのまま後ろへと寝ころぶ。その言葉通り、彼は自分のベストを出し尽くした上での結果なので気にしてないのだが、何度も同じような話をクラスメイトや友達から聞かれていたのでうんざりしているのだ

「なんでも学長がその時のお前の様子を見てたらしくてよ、あの記録に対して学長が自ら評価して下さるとさ」
「な、なにィ！　あの鉄心さんがか!?　どういう事だヒゲおい!?」

畳から勢いよく跳ね起きた琢磨が巨人に詰め寄る

「お、落ち着けって……く、首が……締まるから」

「す、スイマセン。で、なんでまた学園長が？」
「そりゃお前あの人の事だからな。能力がある人間がそれ相応の力を発揮したのに評価されないじゃ、川神院の総代としてのメンツとかあるだろうよ」
「川神院の総代たる者が生徒の力量を見誤っている……的な？」
「どうだろうな。オジサンそっちの方に関してはとやかく言える訳でもないが、あの人の孫が孫なだけにそういうのもアリなんだろ多分」
「まぁ、確かにあそこは何でもアリなところだからな……」
「あそこだけじゃなくて、この街全体にいえる事だとオジサンは思うけどな。あぁ、それと表上は記録なしだけど、評価としてはしっかり入ってると思ってていいぞ」
「そうですか……なんか、ホント色々迷惑かけてすいませんヒゲ先生」
「気にすんな。先生はお前以上に面倒な生徒を何人も抱えてんだ、大したことねぇよ。それに時々代行業を手伝ってもらってるしな、むしろお前さんには色々と感謝してるぜ」
「せ、先生……はい、王手」

会話をしつつも将棋を指す手を止めていなかった２人
次に琢磨が動かした駒によって巨人はあっさり詰んだ

「げ、マジかよ……その一手待ってくれ。オジサンに感謝してるならさ、頼む」

巨人は慌てて拝むように琢磨に頼みこむ

将棋一つで簡単に生徒に頭を下げてしまう教師もどうかと思うが・・・

だがこの宇佐美巨人という男、こうしてだらけ部に入り浸っている事から分かるように教師としては厳格であるとは言えず、どちらかというと不真面目な態度が目立つ

しかし、教師の職業とは別に『宇佐美代行センター』で代行業を営んでいる彼は様々な経験を豊富に積んでおり、彼が行う授業自体は評判が良いいのだ

そんな巨人との、こうしただらけ関係は琢磨が入学し、しばらくして出会ってから今日に至るまで続いている。途中新入部員が入るというイベントもあったが、それ以外は特に何事も起こることなく休憩時間になれはこの部屋に足を運び、3人して部活動（だらけること）に費やしている

「悪いな先生、いくら将棋といえどこれも勝負。戦いである以上、手を抜かないのが俺の主義なんだよ」

「とか言いつつも、飛車と角なしのハンデはつけてくれるんだよなお前は……」

「そうでもしないとアンタ俺に勝てないでしょうが！　ホラ、さっさと白旗あげな」
「ま、待て！　まだだ……まだ終わらんよッ」

それまで唸っていた巨人がようやく次の一手を指す
琢磨もそれを見て、すかさず自分の駒を動かした。・・・・またしても王手である

「な、なん……だと」
「戦いとは常に二手、三手先を読むものだよ。決着だな、ヒゲ先生」
「認めたくないものだな……自分自身の……若さ故の過ちというものを」
「３５になるオッサンが何言ってんだ！　早く片付けろや」

琢磨にいびられ巨人は渋々将棋の駒を戻し始める
これでも一応、琢磨と巨人は生徒とそのクラスの担任教師の間柄だが
こうして一目があまりない場所では敬語抜きのフランクな口調で会話している
２人はそれぐらい気安く話し合える関係だった

「あ、そうだ。　なぁ先生、明日Ｆ組に転入生が来るらしいじゃねぇか。一体どんなヤツ

なんだよ?」

ふいにクラスメイトとの会話の中で出てきた話題を思い出した琢磨が巨人から情報を聞き出す

なんでも明日の金曜日、ドイツから留学生がS組の隣のクラス2―Fへやってくるらしいとのこと

「ん、確かドイツのリューベックからか。クラスは違うが仲良くしてやれよ。そうやって育んでいく思い出が大切なんだ。そういうのがないと、オジサンみたいになるからな……」

「そりゃ大変だ。日本中が先生のレベルに落ちたらこの世の終わりだぞ」

「ツッ……言ってくれるなお前、愛で斬ってないから余計に痛いぜ」

「じゃなくて、転入生に関するもっと詳しい情報はないのかよ?」

「特にこっちにはそう言った情報は来てないな。　ただクラスの女子連中は男だって話してるのを聞いたぜ」

「あれはアテにならん。おそらく誰かが流した虚報だ。だから逆の女だとは見当がつく」

「虚報？　何の為に……ってあぁ、なるほどね。それは多分、男か女で賭け事してるＦクラスの仕業だな」
「となると、流した奴も察しが付く。……相変わらず姑息な手を使う野郎だ」

琢磨は腕を組み、僅かに苛立ちをみせる
彼自身、どちらかというと自分の力で解決するタイプだ
仲間内にも頭の冴える軍師のような人物はいるが、あくまで自分を含めた仲間の行動に伴う効率や効果を補助する役目として認めている。だが琢磨はこういった裏工作などで自分の利をより大きく得ようとする狡猾な人間はあまり好感をもてないのだ

「ま、どちらにせよ明日には分かる話だ。家に帰って寝てればすぐ明日が来るし、それまでのお楽しみって事にしとけや」
「それもそうか……んじゃ、今日はそろそろ帰るわ」
「オイオイ、オジサンせっかく準備したんだから、もう一局どうだ？」
「悪いが、さっき仲間から下校するってメール来たからな。俺も帰らないと、それじゃ後片付けヨロシクッ」

そう言って琢磨は颯爽と茶道室を飛び出していった

1人残された巨人はため息をつくと将棋の駒や将棋盤を元あった位置へ戻し始める

「やれやれ、やっぱりこう急に1人になると寂しいもんだな。あぁ～、小島先生と結婚して～」

ダメ中年の呟きに答える人はなく、傾きつつある日が差し込んだ室内にいる巨人の背中はより一層哀愁が漂っていた

――――――――――――――――――――――――

空が赤みを帯びてる頃、多馬川の河川敷を仲良く歩いている人影が3つ。琢磨、準、小雪の3人である。多馬川は落日の陽光を赤く照り返しながら流れ、揺れる川面にいくつもの輝きを灯す美しい光景だった。その川沿いをフワフワと羽ばたく蝶を追いかける小雪、そしてその後を琢磨と準がゆっくりと後を追う

いつもの見なれた道のりであるのに、空模様の色が1つ違うだけで何処となく郷愁を感じる。それは生まれが東京の琢磨も同じこと。初めてこの地に訪れたのが小学5年生の時。仲間と出会い、師と出会い、自分の生き方を決定したこの街

琢磨の心の中では、もう川神が彼の故郷として深く、太く、根付いていた
守りたい景色がある・・・・・守るべき仲間がいる
そう再認識させれるこの風景を見て、琢磨は心の中でもう一度気を引き締める
この茜色は大気による光の屈折現象であることに過ぎない
頭では理解出来ていても、そこにこうして感傷を抱くのは一体なぜだろう・・・

そんなことを考えながら河川敷を歩き続けてしばらく、3人は目的地に辿り着く
準や小雪達が現在住んでいる『渋川寮』である

「ほらユキ、到着したぞ。そろそろ降りろ」
「ン～……Ｚｚｚ……Ｚｚｚ」

ここまでに来る途中、小雪からおんぶをせがまれ、運んできた琢磨は背中にいる彼女

に声をかける
が、小雪は揺りかごに眠る赤子のようにスヤスヤと寝息をたててていた
「まったく……準、このままユキを部屋まで運ぶから2階に上がる許可くれ」
「了解、その間にリビングで茶でも淹れとくから一服していけよ」
「悪いな、それじゃお言葉に甘えさせてもらおうとするか」

そのまま2人は寮に入り、琢磨は小雪の部屋がある2階へ上がり、準はそのままリビングに直行する。リビングに置いてある机では、1人の青年がコーヒーを飲みながらパソコンを広げていた

「お、なんだ若。先に帰ってきたのか」
「おかえりなさい準。ええ、今日は早めに切り上げることが出来たものですから」

ニッコリと微笑む眼鏡をかけた優男の名は『葵　冬馬』
川神市内にある大病院の院長の息子であり、次期跡取りになる人物
準の父親が副院長なこともあり、2人はメンバーの中で最も付き合いが長い古くから

の親友だ
　両親とも病院での仕事が忙しく家を空ける事が多かった為、川神学園への入学を機に寮生活をすることに
　因みに小雪の里親もその病院の看護婦で、同じ事を理由に小雪を冬馬達と同じ寮へ入れさせている

「珍しくユキの姿が見えないようですが、部屋にでも行きましたか？」
「ここに来るまでにボスの背中で寝ちまってな、ボスが部屋に運んでる最中なわけよ」
「フフッ、そうですか。相変わらずユキは甘えん坊ですね」

　冬馬の問いかけにそう答えつつ、慣れた手つきで湯呑みにお茶を入れる準
　そこへ小雪を運び終えた琢磨がリビングへとやってきた

「おう冬馬、今日もお仕事お疲れさん。そっちは順調か？」
「まずまずといったところです。流石に学校の授業のようにはいきませんね。今もこうして覚えたことをパソコンに整理しているところでした」

冬馬がパソコンを見やすくなるよう傾け、琢磨がその画面を覗き込む。が、すぐにその場から離れてしまった

「ウッ……すまん、少し酔った。早くお茶をくれ準」
「ものの数秒でデジタル酔いかよ……ホント機械に弱いんだなボスは」
「まぁいいじゃないですか準。そのほうが逆に可愛げがあるというものですよ。ねぇ琢磨？」
「……プハッ。別に俺は可愛げなんて要らないんだがなぁ」

熱いお茶を一気に飲み干した琢磨が険しい顔をする

「そうそう、流石にボスには似合わねぇな。可愛いってのは小さい女の子にこそ相応しい言葉だぜ。あぁ……委員長可愛いよ委員長」
「携帯の画面見ながら何ニヤニヤしてんだハゲコラァッ！」
「イデデデデッ！　ま、待ってくれ！　それホントに洒落にならないってボスッ！」

おそらく2―Fの委員長のことを言っているのだろう

毛のない頭をツルリと撫でながら携帯の画面を眺める準に琢磨はアイアンクローをお見舞いする
が、携帯の着信音が鳴った事により琢磨から準への制裁は未遂で終了した
「クッキーからだ……ふむ……なるほどね。了解……っと」
「なにか急ぎの用件でもありましたか？」
「いやなに、ちょっと買い物を頼まれただけだ。今ちょうど夕飯の支度してるから手が離せないんだと」
「まるで新婚夫婦のやりとりですね。琢磨を独り占めですか……フフッ、少し妬けます」
「帰るのが夜遅くなった夫をビームサーベルや電撃で出迎える新妻がいるか？　まぁ俺としてはそれもいい経験になるからいいけどな。……と、こうしちゃいられないな」
慌てて琢磨は荷物をまとめ玄関へと急ぐ
このままのんびりしていたら本当に襲われかねない
冬馬と準に別れを告げ、琢磨は渋川寮を後にした

～朝の鍛錬と登校風景～

太陽が姿をまだ見せない明朝、人々がいまだ寝静まる時間帯

青年は待った・・・・・

ただひたすらに待っていた・・・・・

待ち合わせ場所は自宅の地下室、ガランとした薄暗い殺風景な部屋だ

黒いコスチュームに身を包み青年は部屋のコンクリート壁をじっと見続けている

青年は身体から流れ続ける瀧の汗に目もくれず、身じろぎ1つしない

いったいどれだけの時間待ち続けているのだろう・・・・・

空一面うっすらと星が見渡せる瑠璃色の夜明けから始まり、すでに1時間は経過している

それでも、青年は待ち続けた

そこにいるハズもない――――――――――それが出現(あら)われる瞬間(とき)を・・・

（……ッ！　来るッ）

青年に待ち焦がれた瞬間が・・・感覚が呼び戻った

（ほら……ほらァ……俺はここにいるぜェ）

見つめ続けていた壁と己の間にある空間が揺らぎ、やがてその実体がより鮮明になる

そこにありもしないものをイメージ――――――――具現化する

「悪ィな……お前は俺の目標なんだ」

そこに存在しないものを――――――眼前(そこ)にありありと創造(つく)り出す

「ほんの暫く付き合ってもらうぜ……百代オ」

この青年、鉄　琢磨の非凡性は――――――――――――――――まさにこの想像力にこそあったッッ

（違う、お前はこんなモンじゃない……そうだろ？）

かつ、琢磨の想像力に驚かされるのはこれだけではない

（もっと強靭く）
（もっと迅く）
（もっと恐く）

（もっと欲深く）

自分自身に対する厳格（きび）しさ・・・・これもまた人の常識を逸脱していた

（もっと………美しく………だな？）

対戦者を自分の都合の良いのように思い描き

実戦で出来るはずもない大技を用いて相手を圧倒する競技者（アスリート）達

（そして、本物より………強くッッ）

そんなタイプとは――――――真逆にいたッ

「キャオラァァッッ」

この日の早朝、神奈川県川神市の一部地域でのみ数度にわたって震度２の地震を観測。だが気象庁は『またＫＡＷＡＫＡＭＩか………』の一言で片付け、公表する事はな

かった

しかし彼等は知らない。この震源地が親不孝通りにある一軒の地下である事を

そして、１人の青年による独闘が地震の原因であった事も・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

窓から朝の光が射しこみ、その刺激に気付いた琢磨がゆっくりと瞼を開ける

視界に広がるは知らない・・・いや、いつもの見慣れた天井だった

「おはようございます、琢磨」

その声と共に上から覗き込み、優しい笑みを見せる顔に琢磨は朝の挨拶を返す

「おはようクッキー。今、何時だ?」

「ちょうど6時30分になったところです。お体の具合はいかがですか?」

「骨に異常はなし、多少あざが残ってはいるが全身の痛みもほぼ引いてる。問題ないな」

琢磨は頭に置かれていた氷水の袋をよけ、膝枕をしてくれていた女の子から上半身を起こす

着ている服はいたるところがズタズタに破れ、血で染まってたりしているが特に激しい痛みは襲ってこない。琢磨はそのまま立ち上がり両手を顔の前に出し、拳を握っては開きを数度繰り返しながらそう答えた

「それは良かった。では朝食にいたしましょう。食事の用意をしますので、琢磨はシャワーを浴びてから制服に着替えてお待ちになって下さい」

彼女はスッと立ちあがり食事の準備へと台所へ向う

琢磨はすぐさま浴室で体を洗い、パリッと整い綺麗に畳まれている自分の制服に着替えて居間へと戻った

「食事の用意が出来ました。味噌汁は少し熱いので火傷をなさらないようにして下さい」

すでに居間のちゃぶ台には彼女が作ってくれた料理が並べられていた

白いご飯に豆腐とワカメのみそ汁。アジの開き、沢庵、納豆・・・そしてサーロインステーキ

料理から漂う香りは琢磨の食欲をより一層かきたてる

「んじゃ……いただきまーすッ」

「どうぞ召し上がれ」

琢磨は味噌汁のお椀を手に取ると息を吹きかけ冷ましながらゆっくりと口の中へ流しこんだ

現在、琢磨が暮らす家で彼の身の回りの世話をしている彼女の正体は人工知能搭載型ロボット『クッキー』――――――そうロボットである。傍からみればピッタリしたボディースーツにエプロンを身に付け、装甲のような金属パーツを身体の各部位に装備しているコスプレ美少女にしか見えない。だがれっきとしたロボットである

元々は九鬼財閥がとある人物が開発したロボットに対抗してクッキーを作り上げた

英雄はこのクッキーを想い人の誕生日プレゼントにする為、まず稼働テストとして想い人の誕生日が来るまでの間、琢磨に預かってもらうことに。それが琢磨とクッキーの

出会いである
　当初はご奉仕型の第１形態、警備・戦闘型の第２形態、交渉・翻訳型の第３形態までしか変形しなかったが琢磨と生活をするにつれ、人との絆をもっと深めたいというクッキーの思いが募り、ついには人間に対する好感度がＭＡＸを振り切った。その結果、より人間に近い姿である現在の第４形態へと変形が可能となったのだ
　その後、一度は九鬼に回収され想い人の誕生日に英雄がプレゼントしたのだが、当の本人が「いらなーい」と言った事により、クッキーは自分自身の意思で琢磨の元に帰り今も琢磨の世話を続けている

「お味の方はいかがですか琢磨?」
「うん、相変わらず美味いなクッキーの料理は。栄養バランスもバッチリだし、言う事なしだぜ」
「ありがとうございます。朝食を摂ることは生活の基本ですのでしっかり食べて下さいね」
「分かってるって。……む、この納豆はもしや?」

　かき混ぜていた納豆が普段のものと違う事に気付いた琢磨

こう見えて食事の栄養管理には気を配っている為、こうした変化も見逃さない

「はい、最近西日本で話題になっている松永納豆です。ネットの通販で見かけたので購入しました」

「もぐもぐ……香り、甘み、歯ごたえも良し。粘りも抜群で何より匂いが気にならない。こりゃ美味いな」

「お気に召したのであればまた注文いたしましょうか？　健康に良いとはいえ、これはパックなので色々入っているとは思いますが……」

「いいんだよ。栄養も毒も美味しく食べて血肉に変える度量こそが食には重要だ。また頼んどいてくれ」

「承知しました」

松永納豆を咀嚼しながら答える琢磨にクッキーは静かに頷いた

こうして毎朝、クッキーの朝食と共にゆったりとした時間を琢磨は過ごしている

「朝のニュースで何か気になるのはあったか？」

「それでは1つだけ……今月の初め、タンザニア連合共和国のサバンナで一頭のアフ

リカ象のハンティングに軍を導入したレンジャー部隊がその象によって壊滅したニュースが報じられました。そして昨日、その事件の唯一の生存者が退院し記者会見を行ったそうです」
「ほう、生存者が……で、その人は会見で何と？」
「『伝える事は２つ。我々は一発も弾薬を使用していない。それと……そのモンスターを倒したのは１人の若い日本男児である』との事です。しかし、事件が発生した日がエイプリルフールと重なる事からその生存者は世界中から非難を浴びています」
「とことん運が悪いなその人。そりゃ誰も信じないだろうな……」

朝食をとり終えた琢磨はそう呟きながら登校の準備にはいる

「あ、そうだクッキー。その生存者の名前とか分かるか？」
「確か……サマンという名前の男性です」
「サマンね。了解した。それじゃあ、行ってくるぞ」

いってらっしゃい、と後ろから聞こえるクッキーの声に手を振る事で答え、琢磨は家を出る

――――――――学校に行ったら英雄に相談するかァ

そして象を倒した張本人はそう心に決め、川神学園を目指して歩みを進めた

――――――――

「また朝からド派手にやったなオイ。今度の相手は一体誰だ？　ボクサーか？レスラーか？それともカマキリってか？」
「その程度だったら……俺もどんなに楽なことか。今朝の相手は武神だよ」
「デスヨネー。あの地震起こす程の相手ならそれが妥当デスヨネー」
「大丈夫タクマ？　痛くない？」
「そんな顔するなユキ。俺ならこの通りピンピンしてるぜ？　マシュマロやるから元気だせよ」

琢磨の顔を改めて見て不安な眼差しを向ける小雪をあやすように撫でながら琢磨は苦笑した

「それより英雄を見てないか？　ちょっとアイツに話があるんだが」
「今朝はまだ見ていませんね。彼の事ですから、他の生徒に挨拶しながら登校しているのでしょう」
「そうか……まぁどうせ学校で会えるから今じゃなくてもいいか」

冬馬の言葉を聞き、納得した琢磨はそのまま冬馬達と一緒に多馬大橋を渡り始める
学園に続くこの多馬大橋だが、川神市民からは通称『変態の橋』と呼ばれている
個性豊かな川神学園の生徒の多くがこの橋を渡る為、名づけられているが
ここ近年は本当に変人の出没が増えている
まぁ、バイセクシャルとロリコンを引き連れている琢磨達がその中に入るか否かはさておき・・・

「みっけ～」

そう言って琢磨達の行く手を遮ったこの男は学生でも変人でもなかった
迷彩柄の上着とズボン、中に黒いシャツを着たこの若い男は――――――格闘士である

「オメェが鉄　琢磨だな？」
「そうだが、アンタは？　俺の記憶が正しければ、アンタとは初対面のハズだが……」
「オレァ神心会館三段　加藤清澄ッてンだ。弟が随分世話になったみてェだな」
「弟？……あぁ！　２―Ｂの加藤ね。うちのユキにしつこく言い寄ってきた奴か」

「その後、ボスに制裁されてたっけな確か……」
「オウよ、その兄がこうして来たんだ。後は……理解るよなァ？」
「敵討ちか？　悪いけど、俺達登校中なんだよね。だからまた今度って訳には――――――」
「そうツレない事言うなよ。地下闘技場の最年少チャンピオンさんよゥ」

加藤の言葉に琢磨の眉がピクリと動く

「ヘェ……伊達に世界最大級の空手団体に入っている訳じゃないようだな」
「こちとら本物の実戦空手だぜ？　オメェみたいなボウヤが最強なんざ名乗ってるのを黙って見てる程、優しくはねェんだ……よッ！」

最後の言葉と同時に加藤は持っていた空き缶を琢磨の顔に目がけて蹴飛ばしたが、琢磨は何食わぬ顔で空き缶を片手で受け止める

「タクマッ」「　テメェ……よくも！」

慌てて前に出ようとする小雪と準を琢磨は腕で制する

「なるほど、敵討ちはあくまで建前……本音はそれか」

「そういう事よ。今更、遅刻なんざ気にしてンなよ？　オメェがこれから行くのは学校じゃねェ・・・病院なんだからな！」

挑発する加藤に、琢磨は舌打ちしながら持っていた空き缶を両手で握り始める

「残念だけど、俺はこれ以上遅刻や欠席は出来ない身なんでね。わざわざ仕掛けてきた相手を病院まで運んであげる余裕は――――――――微塵もねェ」

そして広げた手から、ゴルフボール位の大きさに丸まった空き缶がこぼれ落ちた

～～～～ツツツ

「（とッ飛び込めねェッ……あれほどあったガキの雰囲気がすっかり消えてやがる）」

琢磨の気勢に空気が震えるのを感じた加藤は咄嗟に拳を構えた

「どけよ――――――――――通るぜ」

加藤清澄は神心会空手の本部で三段をとる程の実力者である
その言葉を聞いた刹那、一瞬にして自らの細胞が見抜いた
目の前の青年が放つ、尋常ならざるオーラ！
それまで戦った人間とは全く異質な存在感！
それら全てが自分自身を遥かに上回っているッッ
その戦力差はどれほどのものだろう・・・
刃物や銃器等の武器で補えるようなものではなく
仮に兵器を用いたとしても――――――――埋まるのものか!?
それはもはや・・・・想像もつかぬ絶望的戦力差ッッッ

だが、加藤とて神心会の誇りがある
戦わずに逃げるという選択肢など最初から存在していなかった
足に込める力を強め、加藤も覚悟を決める

「(上等だ……イクぜェ。せいせいどうどうと――――――――――――だしぬくッ」

しかし、殺気を放つ琢磨とその殺気に呑まれつつある加藤の2人の間に割って入った人物によって
その空気が壊された

「待ちたまえ」

突如、自分の腕を掴んだ男性に加藤は視線を向ける
そこにいたのは、褐色の肌をした中国人だった
身長は目の前にいる琢磨とほぼ同じ・・・170後半あたり
髪は縛り、一本のオサゲを後ろへと伸ばしている

しかし、そんな顔の特徴などどうでもよくなるような事が加藤にはあった
それは彼の腕を握る力、筋力である

「弱い者苛めとは、関心しないな」
「あ、烈　先生!!」
「(ッ!?……引き戻せない……ッ　なんてケタ外れな握力してんだコイツッ)」

拳法着の袖から僅かに見える腕の筋肉
それだけでこの中国人の肉体が普通じゃない造りをしている事を加藤は認識した

「加藤といったな確か。私に感謝するんだな」
「あぁ?　何をだよ?」
「私が後一秒、声を掛けるのが遅れていれば――――――顔面骨折、脳挫傷、内臓破裂、歯冠破折、失明……いずれにせよ、死に至る重傷もしくは一生に渡る重大な傷害が君を襲っていただろう」

そう言うと、烈と呼ばれた男は掴んでいた加藤の腕を放した

すでに琢磨は興が冷めたのか、ついさっきまで放っていた殺気を消して2人を見ている

加藤も拳を下ろし、戦闘態勢を解く

「それでも闘うというのなら、正式な場で立会人を用意してから行うがよい」

「アンタ……一体何者だ？」

「私の名は烈　海王。この鉄を含め、彼ら生徒達が通う川神学園で教師をしている」

「はァ!?　アンタみたいな教師がいる訳ねェだろ!?」

「真剣だよマジ。しかも、中国では拳雄と称される程の中国拳法の達人だぜ？」

琢磨の言葉に驚きを隠せない加藤

川神には川神院を始め、多くの強者がいるとは耳にしていた

だが・・・学生やその教師までもがこれ程のレベルに達してるとは思いもしていなかった

「私の立場としてはこれ以上騒ぎを大きくするのは避けたい。　お前の気持ちが分からない訳ではないが……ここはお引き取りを」

冷静な口調で加藤を説得する烈
周りを見れば自分達を中心に川神学園の生徒を含め、多くのギャラリーが囲んでしまっている
これ以上、路上での騒動は神心会の看板に泥を塗ることになるだろう

「クソッ……」
「加藤さん。俺、明日の土曜日に神心会の川神支部に顔を出す予定なんですよ。そこで仕切り直し……じゃあダメですか？　ルールとかはそちらにおまかせするんで」
思わぬ琢磨の申し出に加藤は鳥肌が立つもその誘いに乗る事にした
支部といえど神心会は自分のホームだ。そこなら立会人も用意出来るし
ルールをこちらに任せた以上、上手くいけば大金星も狙えるだろう
「ヘッ、いいぜ。明日の9時には支部にいろ！　そこでオメェとの決着をつける……遅れるなよッ」

そう言い終わると、加藤はギャラリーをかき分けその場から去って行った

「いや～助かりましたよ烈先生、危うく苛められるところでした」

「アレはお前に対して言った言葉なのだがな……それよりいいのか鉄、お前はこれ以上遅刻出来ない身ではなかったのか？」

烈の言葉を聞き、彼の腕時計を見ると先程まで飄々としていた琢磨の顔が一変した

「ヤバッ　もうこんな時間かよ！　急ぐぞお前ら！　このままだと真剣で遅刻するぞッッ」

猛ダッシュで川神学園へ走っていった琢磨達の背中を見ながら、思わず烈は苦笑する

実は彼の腕時計は１０分早く進めていたのだ

「さて、私も行くとするか」

周りにいる他の生徒に声を掛けながら、烈も川神学園に向かうことにした

～クリス　来日～

琢磨達が川神学園のB棟に入り、2―Sの教室に到着したのはスピーカーから呼鈴が鳴り響く15分前。烈先生の腕時計を見て急いできた事もあり、幾分か余裕をもって登校出来た。すでに教室には多くの生徒達が椅子に腰掛け予習復習に励んでいる。エリートクラスと呼ばれているS組だが、何だかんだでこうした努力家の優等生が多いのだ

とは言っても現在猛勉強中の生徒は、学年成績の下位グループに属する人間や少しでも上位を目指している人間であり、冬馬のように自分の学力に相当な自信がある生徒や、小雪のようなS組にさえ入っていればそれ程順位に関しては気にも留めない変わり者等は周りの邪魔しないように適度に雑談に興じている

因みに琢磨の学年成績は最高で13位
得意科目は体育と英語。修業による海外遠征のおかげであり
他にも中、仏、独の計4ヶ国語を話す事が出来る
苦手科目は日本史

「平安時代を覚えてる暇があったら腕立て伏せしてる方が為になるわッッ」
と一切、手を付けていないのが大きい理由だろう

「アイツは案の定まだ来ていないか……」
「もう暫くすればＨＲですし、流石に英雄が遅刻するはないですよ。ここは大人しく教室で待ちましょう」

教室を見渡し、探していた人物がいない事を確認した琢磨達は各自の机に座った

「よっ、おはようさん不死川」
「お、おはようなのじゃ鉄。高貴なる此方に進んで挨拶をするとは、お主も見る目があるのう」

隣の席で何かに熱中していた心に声を掛ける琢磨
机にはノートや筆記用具はなく、どうやら勉強していた訳ではないようだ

「今の手の動き……もしかして影絵か？」

「そうじゃ。　なんじゃお主、顔に似合わず影絵にでも興味があるのか？」
「いや、前にテレビでプロの人の影絵を見てさ、その完成度が凄かったんだよね。不死川もああいうのが出来るのかなって」
「当然じゃ、此方にかかればそこらの影絵師の技など造作でもない……ほれ」

そう言うと、心は複雑に手を組み合わせ形作ったものを自慢げに琢磨に見せる

「……で、これは一体何なんだ？」
「見て分からぬか！梟なのじゃ。フクロウ」
「そう言われてもな……影でしか見てないから手だけ見せられても分からないっての」
「まぁお主のような不器用者には、ちと難しかったかもしれんのう。それなら……これはどうじゃ？」

今度はこれ見よがしに蟹の形を作る心
完全に琢磨を馬鹿にした行動である

「これは……カニか。その様子だと他にも色々知ってそうだな。なぁ、俺にもユキを驚

かせるような影絵教えてくれないか？」
「そんな簡単に学べるモノではないわ。教えて欲しければ机に頭をこすりつけよ」
「むゥ、確かに名門不死川家の人間からタダで教えてもらおうとは、俺も図々しかったな。今回は諦めるとしよう」

邪魔して悪かったな不死川――――――――そう最後に言って琢磨は席に戻る

「あ。でも……簡単なのも、あったりして……なんならそれは、普通に教えても（小声）」

小さな声でポツリポツリと漏らす心
せっかく琢磨から声を掛けてきたのに、此方はあんな態度を・・・と内心ひどく後悔していた

「……はは、今さら……聞こえぬか。……はぁ」
「ところがドッコイ聞いてたぜ。　影絵は初心者だからよ、お手柔らかに頼むぜ先生」
「なッ!?　……全く、妙な男じゃのう……よいか、まず手を広げい。そして――――――」

こうして朝は心と親交を深めた琢磨
根は良いやつなので、同じクラスメイトとして仲良くやっていきたいものである

そして時間は過ぎていきチャイムが鳴る5分前
教室の戸が開くと、そこから相変わらずよれよれのスーツを着た担任の巨人が入ってくる
いつもはチャイムがなるギリギリの時間に来る事が多い彼にしては珍しかった

「あー、まだそのまま座ってていいぞお前達。ＨＲは時間通りに行うからな」
「どうしたんだ？　先生にしては随分早い時間に来たじゃないですか」
「まぁな、隣のＦクラスに今日転入生が来るだろ？　それで小島先生がいつもより早めにＨＲを行うって教室に向かったもんで、オジサンもホイホイと釣られて来た訳よ」
「まるで金魚のフンじゃな。お主とあの先生の間に縁などありはせぬのに・・・往生際が悪いぞヒゲ」
「よけいなお世話だ。諦めたらそこで試合終了だって聞いた事あるだろ？何事にも負けずに粘り強くいけば、必ず最後には上手くいくんだよ。お前らも覚えとけ？」

「カッコイイ台詞っぽい気もするが、なんかストーカーの言い分みたいだなソレ」
「おまわりさーん、ここにヘンタイがいるよー」
「駄目ですよユキ、先生はまだ予備軍ですから。先生もその姿勢は評価しますが、節度ある行動の範囲でお願いしますよ?」
「あれ?　おかしいな……オジサンいつの間にか教え子に説教されてね?」

そんなうなだれている巨人を余所に、クラスの一部生徒がざわつき始める
視線が窓に集まっている事から、どうやらグラウンドに誰かが来たようだ

「お、さては噂になってるドイツからの転入生かッ!　むこうの国の女の子は天使って言うからな……はるばるやって来たその愛らしい顔を拝むとしようッッ」

琢磨や冬馬から転入生が女子と聞いていた準はその姿を頭の中で脳内補完すると、意気揚々と教室の窓にへばり付いた・・・・・・が、

「なん……だと?」
「どうした準?　そんなＲＰＧの最終面直前のデータが消えたような声を上げて」

「おおかた転入生が小さな女の子ではなかったのであろう。世の中、小雪のマシュマロのように甘くはないのじゃ」
「それもある……確かにッッ　それもあるが、その転入生が乗り込んできてるんだよ」
半ば呆然と答える準の最後の言葉に疑問が生じた琢磨達は、身を乗り出してグラウンドを見下ろした

――――――

欧州人であることを象徴させる碧眼は宝石のようでありながら鋭く、無粋な言動を一切寄せ付けない

ただそう・・・・騎士なのだ
騎士である以上、必要不可欠なものがある
そう・・・・・・・馬である

白馬に跨り颯爽とやってきた転入生に川神学園生は大いに盛り上がった
それは転入先の２―Ｆも当然、例外ではない

「おおおお金髪さんッ！　可愛くね？　真剣可愛くね!?」
「超ッッ、当たりなんですけどぉぉぉ!!」

福本育郎や島津岳人を始めとした思春期真っただ中のＦ組男子勢は美少女の転入にテンションは最高潮に

「だっはっはっはっはッ！　馬に乗って登校かよ!?　面白ェあいつ面白ェッッ」

それとは対照的に、色恋沙汰に興味がないバンダナを巻いた青年　風間翔一は馬に乗ってきた事に大爆笑している

「改めて紹介しよう。彼女が私の大切な愛娘、クリスだ。皆、どうか仲良くしてくれたまえ」

先に教室に来ていた転入生の父親フランクがクラスメイト1人1人の顔を見るように言う

自分の娘が馬で登校している事には特に気にも留めていない様子だ

「ねぇ大和、この人達ってもしかして……」

グラウンドの光景と父親の姿から、椎名　京は1つの答えを導き出す

普段はファミリー以外の人間にはそれ程興味を示さない彼女も

今回ばかりは、さすがに無視出来そうになかった

「あぁ、間違いないな。この２人……日本にとんでもない誤解をしている外国人だ」

椎名の問いかけに答えた直江大和は額を手におき、呆れ果てて溜め息も出ない様子でいた

一方、Ｓ組はＦ組とは対照的で、このクラスらしい反応だった

「馬だ」
「馬だな」
「馬じゃな」
「馬ですね」
「おォー、お馬さんだ！」

上から順に琢磨、準、心、冬馬、小雪である

「なんだよ、ありきたりだなオイ。もっと盛大に現れたのかと思って期待してたのに……」

「そういうリアクションすると思ったぜ。つか、どんな想像してたんだよボスは？」
「例えば・・・軍艦一隻まるごとグラウンドに突っ込んで来るとか？数年前、松笠の学校に転入生が来た時、実際にあったらしいぜ」
「スゲーなそれ。どこの学校にも、そういう生徒はいるもんだな」
「まぁどちらにせよ、あのような非常識極まりない雌猿がＳ組に来なくて一安心なのじゃ。ニョホホホ」

「「(お前が言うなッッ)」」

Ｓ組生徒一同は口には出さなかったが、胸の中ではその言葉が完全に一致した
確かに牛車で登校するような人間に言われる筋合いはない

「それもそうですが……私達のクラス委員長も負けず劣らずかと思いますよ？　ホラ」

冬馬の視線を追うと、そのクラス委員長が転入生の後ろから登校してきていた

「ここが今日から自分の学び舎か。それにしても……自分以外で馬登校の者はいない

のだろうか？」

キョロキョロと辺りを見渡す転入生のクリス

ＨＲが迫っていることもあり現在グラウンドには生徒はいなかった

それもあるが、第一馬に乗りながら登校する生徒など、この学校といえど前例はない

そう、あくまで『馬登校』に限っての話だが・・・

「む？　あやつはもしやドイツの転入生であるか。あずみ、人力車を止めよ！」

「了解しました英雄様！　ブレーキング！」

クリスの後方から爆走してきた人力車が彼女の真横で停止し、その座席から金色に輝くスーツを身に纏った２―Ｓのクラス委員長にして世界三大財閥に名を連ねる九鬼家の御曹司『九鬼英雄』が立ちあがる

その人力車を引いてきたのは英雄の専属メイドである九鬼家従者部隊序列１番『忍足あずみ』だ

「フハハハハハ！　我、降臨であるッ　おはよう、ドイツからの転入生よ。初日の朝から馬で登校とはやるではないかッ！」
「おはようございますッ！」

英雄とあずみから挨拶を受けたクリス
彼女は英雄が乗ってきた乗り物に目を輝かせる

「そ、それは……ジンリキシャ！　さすがはサムライの国だな！」
「うむ、そして我が名は九鬼英雄ッ　いずれ世界を統べるものであるッ！」
「自分はクリス！　馬上にてご免」
「構わん、我の心は寛大である！　クリスよ、この栄光の印、とくとその眼に焼き付けるがよいッ」
「おォ、その姿……まるで遠山ッ」

英雄はスーツの背中に刺繍されている昇龍をクリスに見せ付ける
彼女もさらに興奮した様子で歓喜の声を上げていた

「鉄……お主ら本当にあの九鬼英雄と親友なのか？」
「やめてくれ、今だけは……今だけは他人でいたいんだッッ！」
心の問いかけに琢磨は頭痛を抑えるようにこめかみを押さえながら叫んだ

～ミス・ブシドーＶＳミス・キシドー～

「全校生徒の皆さまにお知らせします。只今より第一グラウンドにて決闘が行われます。内容は武器を使用しての戦闘です。対戦者は２－Ｆ所属の『川神一子』と、同じく２－Ｆ所属の『クリスティアーネ・フリードリヒ』の両名。見学希望者は第一グラウンドに集合して下さい』

転入生の登場に各クラスが落ち着きを取り戻し、２－Ｓに英雄とあずみが到着してＨＲが始まり、それも終わりに差し掛かった時だった。プツッという音が教室のスピーカーから聞こえ、それに続いて校内全域に向けたアナウンスが流れる

決闘・・・それはこの川神学園に存在するユニークなシステムである

生徒の自主性、競争意識を尊重する為に学長でもある川神院の川神鉄心が採用した制度であり、互いの合意で両者のワッペン同士を地面で重ねることで、白黒つけて戦う事を学校側が許可しているのだ

決闘内容は前述の戦闘でもいいし、スポーツや論戦等お互いが納得すれば何でもい

い。さらに、その決闘による怪我や負傷は全て合法となる
武家の末裔が多いこの川神では、ある意味象徴的でうってつけともいえる校則だろう
「おいおい、転入して早々いきなり物騒な展開じゃねぇか。しかも戦闘とか本来なら職員会議で承認されてから行うものじゃなかったのかよ?」
巨人の言っている事は正しい。決闘における内容で肉体を使った戦闘に限り、事前に詳しい決闘法を明記し教師に届け出す必要がある。その後、職員会議をかけられ許可が下りてから漸く行えるものであり、今回のように短時間で決行される事などまずあり得ない
ただ、この規則には1つだけ特例が存在する
それは・・・・・
「あー、多分学長の特権乱用だな。今2―Fの教室から1人だけ尋常じゃない気を感じるし」
決闘という言葉を聞くと学園内のどこにでも即座に現れる学長本人の許可が下りた

場合である
　さらに言えば、その決闘自体を無観客で行える権限も持っており、学長はまさにこの学園における絶対権力者的存在なのだ
「おそらくは転入生を歓迎しようと一子殿が提案したもの。常に己を磨き続けるその真っすぐでひたむきな姿に他者をおもてなす心遣いまでお持ちとはッ……流石は一子殿ッ！」
　自身の想い人である川神一子にひどく感銘を受けた英雄はプルプルと拳を震わせている
　当の彼女はそのテンションの高さから若干、苦手意識を持っているが英雄の思いはまさしく本物だ。仲間内でも彼の片想いが成就することを願わずにはいられない
「さて、こうしてはおれん。愛しの一子殿の決闘ならば我も声援を送らねばッ　行くぞあずみ！　すぐに第一グラウンドに赴くのだッッ」
「了解しました英雄様ッ　ただちに一子様を応援できる特等席をご用意しておきますッッ」

待っていて下され一子殿、フハハハハハ――――――――――と豪快な笑い声と共に教室から英雄が出て行き、それよりも先にあずみはその場から一瞬にして姿を消していた

「さて……英雄達は行ってしまいましたが、私達はどうしましょうか?」
「此方は遠慮するのじゃ、野蛮なＦ組共の決闘など見ても目の毒にしかならぬからな」
「俺も不死川と同じく、あと１０年早く会えてれば最高だったのに……ロリでもない奴に興味はねぇ」
「んー……タクマが行くなら僕も行く」
「私はせっかくの機会ですので見に行くとして・・・賛成1に反対2。ユキは今のところ中立ですが、後は琢磨の回答次第ですね。どうしますか琢磨?」

冬馬の問いかけに各々がそれぞれの理由で口を開く
自分自身に委ねられた最終判断。琢磨も頭の中で決断を下し答えようとした時

「うぐゥ!?」

突然、準が呻き声を上げ悶え始める
よく見れば準の首には頑丈な鎖が幾重にも巻かれていた
「英雄様が自ら行くとおっしゃったんだ……当然、お前も行くよなァ鉄？」
片方は鎖分銅で準を縛り上げ、もう片方の手には小太刀を持ち、心に刃先を向けながらあずみが剣呑な表情で琢磨を睨みつける。こうなると準と心は賛同する他ないだろう
「そう怖い顔しなくても心配いらねェよあずみさん。俺も観戦しようと思ってたから」
「ヘェ、アタイはてっきりお前の事だから行かないもんだと高を括ってたけどな……」
琢磨の言葉にあずみは満足した表情で鎖分銅と小太刀を仕舞った
「まァ、ちょっとした退屈しのぎにはなるでしょう……なんせ」

そう言った後、琢磨は笑顔でハッキリとこう答えた

――――――『武道愛好家』連中によるチャンバラごっこなんだからな

――――――

している英雄の横で自分が彼女の事を格闘士目線からの評価として、思わず悪く言ってしまうかもしれない。そう考え琢磨はどこか別の場所から見物しようと探し始めた

「朝食用のお弁当いかがですかー!?」

「決闘トトカルチョッ　どっちが勝つか当ててみないか!?　さぁ張った張ったッ！」

商魂がたくましい生徒達はたとえ臨時の決闘でも対応が早い。そんな料理部から朝弁用のおむすびを購入し、頬張りながら琢磨は自分の見学する場所を求め歩き続ける。平均的な身長とはいえ場所が悪ければ、背伸びをしても見えそうもないだろう

いっそ花山がいれば逆に自分が入れるものの・・・と、ふと校舎を見上げれば屋上のフェンスから花山が酒瓶に口をつけながら、グラウンドを見下ろしていた。多分中身は川神水だとは思うが、彼が手に持っているとワイルド・ターキーにしか見えない

花山がこの場にいない今、自分はどうするかと考えている琢磨の視界に絶好の観戦ポイントを発見した。そこには1人の教師が立っていて、黒いオサゲが風に揺られている。服装はカンフー映画で見る典型的な拳法着で、その後ろ姿だけで何かを語っているかのような気さえした

「スイマセン、隣いいですか？烈先生」
「ん、鉄か。私は一向にかまわん」

失礼します、と身体を滑り込ませて琢磨は烈の隣に立った。ちょうど決闘に使われる範囲のグラウンドを一望でき、自分の横には武術に深く精通するあの烈海王がいる。琢磨にとってはまさに絶好の観戦場所と言えよう

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行うッッ　両者、前へ出て名乗りをあげるがよい！」

老人とは思えない覇気を纏った川神学園の学長、川神鉄心の言葉に従いまず最初にポニーテールが特徴的な鉄心の孫娘の1人である『川神一子』が一歩前に出た

「2年F組　川神一子！」

続いて今話題の転入生クリスが一子に習い、同じように前へ出る

「今日より２年Ｆ組！　クリスティアーネ・フリードリヒ！」

お互いが名乗りを終えるとクラスメイトを応援する声や転入生を歓迎する声など、生徒達からそれぞれ声援が送られる

「ワシが立ち会いのもと、決闘を許可する。決着がつくまでは何が起ころうとも止めぬが、勝敗が決したにも関わらず攻撃を行おうとするならば、ワシが介入させてもらおう。良いな？」

「承知したわッ！」

「承ったッ！」

鉄心の注意事項に２人はしっかりと了解し、それを聞いた鉄心は決闘の邪魔にならないようにその場から離れる。すでに一子とクリスは視線をぶつけ合い、バチバチと火花を燃やしていた

そんな２人の様子を眺めつつ格闘士達はお互いの意見を交換し、見解を出していた

「川神一子の武器は薙刀。一方、転入生はレイピアか……さてこの決闘、烈先生はどうお考えですか？」

「まず川神だが、彼女の戦う姿は何度か拝見している。薙刀の扱いに関して言えば、彼女が学園一で間違いない。そこまでの努力も称賛に値するだろう」

だが・・・と烈は最後に付け足した

「彼女のいる場所は既に――――――――――――――――――――我々が二千年以上前に通過した場所だッッッ」

「相変わらずハッキリと言いきりますね烈先生は」

「厳然たる事実だ。異論は認めんッ」

「そりゃあ、紀元前も前から貴方達は武器を持って戦ってたんだ。土器なんて作ってた俺達が追い付くのは難しい話ですよ。なら、烈先生は転入生が勝つと?」

「僅差ではあるが実力は彼女の方が上なのは確かだ。しかし、その彼女の武器であるレイピア、あそこまで刺突に特化した剣術は初めて見る。槍よりも短く、細く、脆い……あのような武器が実戦で使えるのか?」

「レイピアの発祥は16～17世紀のヨーロッパと言われ、主に護身や決闘の際に使われていた紛れもない武器ですよ。ああ見えて重さはありますし基本は両刃、一点に加わる威力は相当あります。それにレイピアを使う場合、敵の攻撃は受け止めるのではなく

回避。その隙を狙って一気に仕掛けるスタイルになるでしょう」
「そうか、ならば川神は懐に入られない以上一方的に攻められる。だが、不用意な攻撃は逆にクリスティアーネに反撃の機会を与えてしまう……」
「武器の差、場の変化によってはどちらに転んでもおかしくない――――思ってたよりも少しは楽しめそうだな」

一子の強烈な薙刀がクリスを襲うのか、それともクリスのレイピアが一瞬で一子を仕留めるのか・・・兎にも角にも
《いざ尋常に――――はじめいッッッ》
開始の合図が鉄心より告げられ
戦いの火蓋が切って落とされた
――――――

鉄心の合図から３０秒が経過している
一子は薙刀を低い位置で構えたまま動かなかった。その構えは堂に入り、一切付け入る隙がない
クリスも剣先を一子に向けたまま動かない。だが、すぐに攻撃できるよう一子を見据えている。獲物を逃さない猛禽類のような目をしていた
最初の立ち上がりは相手の出方を窺う
とても静かな時間だった

「(クリスの放つ突きが、どれくらい速いのか最初に確認したかったけど……)」

一子は構えを解かないまま、頭の中で考えを巡らせる。親友である京は言っていた『自分よりも強い』と・・・
一子は京の実力を充分に知っているつもりだし、その彼女がクリスの実力を見誤っているとも思えない。ならばクリスは自分にとってかなりの強敵である事に違いない
さらに言えばクリスとの決闘は今回が初めて。その彼女が繰り出すレイピアの攻撃速度が一体どれほどのものなのか？　その速さは自分が攻められた場合、対処できるのかどうか・・・それを確かめるべく、一子はクリスの先手を待ち彼女の初撃に備えてる

事にしていた

だが、クリスは一向に攻める気配がない。薙刀とレイピア、そのリーチの差は歴然であり、また一子が薙刀を低く構えている。その構えはクリスの攻撃に対し、斬る・突く・払うのいずれでも即座に反撃出来る体勢だった

その状態の自分に仕掛けるほどクリスは甘くなかった。もしも相手の立場に立っていたら自分も同じ様に迂闊に攻めたりはしないだろう。かといって相手の攻撃を誘う為にあえて隙を作ってやるのも、実力が未知数なクリスに対してはリスクが高すぎる

「(このままじゃあ埒が明かないわね……ここはクリスの攻撃に警戒しつつ、間合いに入らせないように攻めるわッ)」

この決闘で初めて仕掛けたのは一子だった

「いっけぇぇぇぇッッ!」

「ッ!……勝負ッ」

小さく振り上げた薙刀をクリスの頭にめがけ勢いよく振り下ろす。大振りではない

ものの、速さの乗った薙刀の斬撃は直撃すればひとたまりもない
クリスは軽やかなステップで冷静に一子の攻撃を避け、すかさずレイピアを一子に向け直す。が、すでに一子は追撃の体勢に入っておりクリスは踏み込む事が出来ない

「――――ッ！」
「残念だけど、間合いには絶対入れさせないからッ」

一子はクリスの空けた距離を再び詰めて今度は突きを繰り出す。それに対し、彼女が横へと回避したのを見た一子はそのまま休ませることなく薙ぎ払いを仕掛ける。この連撃にクリスは慌てることなく大きく跳躍することで逃れ、再び一子との距離をとる
レイピアは突きの攻撃が主な故、その場に立ったままでの攻撃では腕の力のみなので威力が低くなってしまう。大地を蹴り、充分な加速と合わせた鋭い一撃にこそレイピアの本領が発揮されるのだ

「（そう簡単に踏み込ませてはもらえないな……だが、その攻撃がいつまでも続く訳ではあるまいッ）」

クリスは薙刀のリーチを生かした一子の素早い攻撃の数々に徐々に追い詰められつつあった。だが、決して焦ってはいない。これまでの攻勢で一子はクリスに一撃も当てられておらず、さらにクリスの目は攻撃の速さに慣れつつある。確実に見切れるように気を窺いつつ、クリスはレイピアを握る手を強めた

「その腕……貰ったアッツ」

「（ッ！……ココだ！）」

攻撃の手を緩めない一子はレイピアを持つ右腕に狙いを定め、薙刀を斬り下ろす。だが最初の頃に比べると僅かに振りが大きい。ここが反撃のチャンスと睨んだクリスは、迫りくる薙刀が当たるギリギリのところをバックステップでかわした。そこから自分の足に力を送り、一気に解放――――

「――――ハァアッ！」

電光石火の如き速さで一子の間合いに踏み込むと腕の力も加えつつ、レイピアによる高速の突きを繰り出した

「わッッ!?」

この状況で反撃に出てきたクリスに一子は驚きはしたものの、彼女は当初からクリスの突きを警戒していた。そのおかげで身体がすぐさま反応し、振り下ろしていた薙刀を持ち上げると柄の部分を突貫してくるレイピアの刀身に当て軌道をずらす。それと同時に上半身を捻り、それに合わせて足を上手く運ぶ事によってクリスが繰り出した渾身の一撃を避ける事に成功した

この時、一子とクリスの顔は互いにかなり近い状態であり、見合わせた2人は決闘の最中でありながらも思わず笑ってしまう

「今のは危なかったわ……やるわねクリスッ!」

「そちらも中々、流石は日本のサムライだなッ」

互いの健闘を讃えると仕切り直すかのように両者同時に後退し、間合いを空ける。そして一子は薙刀を、クリスはレイピアをそれぞれの形に構え直した

一瞬の静寂の後、観客である生徒達からは爆発するような歓声が上がる
そんな中、冷静に相対する2人を見て琢磨はニィ・・・と笑みをこぼす。烈は無表情ではあったが、内心穏やかではなかった

「い～～～～い迅さだ。今のが当たってたらヤバかったな」
「(アレがレイピア本来の実力――――――――見誤っていた……華奢で頼りなさそうなあの外見に……あの華やかな装飾に……秘められる冷酷な意思を見損なっていた……ッッ)」
「互いの実力が充分に分かった今、この後にとる行動で結果は決まる。決着の時はもう間近ですね・・・さて」

――――どうやらここからが本番だな一子

そう呟いた琢磨の声が沸きあがる生徒達の歓声にかき消された

「続けて行くぞッ、次で必ず仕留めるてみせるッッ！」

一子の攻撃に目が慣れたクリスは今度は自分から仕掛ける為、構えを取る

「上等よッ、返り討ちにしてやるわッッ」

一子もそれを黙って受け入れる事はせず、吐き捨てるように叫ぶ。たしかにクリスの速さは尋常じゃなかった。しかし、それはあくまで攻撃した際の加速のみ。全体的な速さで言えば俄然自分のほうが有利なことに変わりはなく、このまま一気に勝負を決めても勝算は充分にあるはず・・・

そう思っていた矢先の出来事だった

「川神一子オォォッッ!!!」

突然、グラウンドに轟く自分の名前を呼ぶ声。その声量に一子本人だけでなく対戦者であるクリスまで思わず振り向いてしまった

「え、な、何?! って……テッちゃん?」

「自分達の決闘を邪魔するとは、何者だ!?」

そんな２人を余所に琢磨は言葉を続ける

「速さで競うな　お前の持ち味をイカせッッ」

琢磨の言葉に多くの生徒達が首をかしげる。その言葉に込められた意味を知る者など、それ以上の数の生徒達が理解出来ていないだろう。だが、それでいい・・・他者が分からずとも琢磨にはなんの問題もない

――――――――一子（アイツ）さえ分かってくれれば・・・

「……ッ！　お、押忍ッ」

琢磨の意図を汲み取った一子は気合の入った声で応え、視線を再びクリスに戻す。クリスもそれを感じ取り、琢磨の言動を不服に思いながらも目の前の戦いに集中することに

「よーしッ　再開するわよクリス！」
「いいだろう、あの者が言った言葉の真意……この身で確かめるッ」

再開直後、一子は持っていた薙刀を高速回転させ始める。回転によるスピードと遠心力を攻撃に上乗せし、同時に攻撃の出処を相手に読ませないようにしている。おそらく次の一撃で決める算段だろう

そう予測したクリスはいかなる攻撃が来ようとも迎撃できるように肩の力を抜き、身体に余裕を持たせて構える

「（次の一撃を全力で避けてその隙を突くッ　先程のように逃したりはしない！）」

静かに待ち構えるクリスにまるで臆する様子もなく、一子は薙刀を回転させながら最短距離で彼女の間合いへ踏み込んだ

「川神流――――――――」

頭上へと振り上げる薙刀。その行く末は頭に・・・と思いきや、その刃筋を斜めに流し、脚へめがけて振り下ろされる

「【山崩し】ッッッ」

クリスの剣術であるフェイシングの試合において有効打撃となるのは胴だけだ。しかし、薙刀の試合ではすねへの攻撃もルール上有効である。薙刀とレイピアの特性をよく考えた一子なりの『持ち味』を生かした文句なしの一撃であった

ただ、この事実とは別に彼女には大きな誤算がいくつかあった

まず1つ――――一口にフェイシングといっても多種多様なルールがあり、その中には胴だけでなく全身が有効打撃部位になる種目があるという事

次に2つ――――クリスが幼い頃から習っていたフェイシングというのは、まさにその全身有効打撃のルールで行うものであった事

最後に３つ――――一子がその存在を知らなかった事

「見切ったッ！」
「ッ!?」

以上の３つの事柄から一子の渾身の一撃がよられるのは当然であり、当たると確信していた一撃をかわされクリスに決定的な隙を与えてしまうのは必然であった

「【零距離刺突】ッッ」

クリスは十分な余力をもってレイピアに力を込め、こちらも必殺の突きを一子に繰り出した。一子の両足はベッタリと地面に着いており、自力での回避は不可能だった

・・・・・そう、『自力』だけでは

「うおりゃあァァァッッ！」

一子は振り下ろしたままになっていた薙刀の刃先を地面にそのまま突き刺し、腕の力だけを使って棒高跳びのように斜め前へ身体を浮かび上げた。両足も宙に浮き、腹筋を用いて身体全体を真横にするよう引き寄せる

その直後、クリスのレイピアが空気を切り裂くように一子の真下を通過した

「何ィッ!?」

一子はそのまま身体をバネのように伸ばすと同時に薙刀から手を放す。そして両手が自由になったままクリスの背後へと着地に成功した一子は、すかさずクリスの腰を両腕でがっちりとホールドした

掴まれた瞬間、クリスの背筋がゾクッと凍りつく

――――――引っ掛かったッッッ

罠ッッ　ブラフ　計画的……

「川神流――――――」

この技は・・・ッッ　バックドロップ!!!
あれを自分がやられるというのか・・・
日本のサムライにッッ
凄いスピード・・・青空
そうか、今自分は真上を向いているのか
校舎の3階・・・ッ　2階・・・ッ
一回転　逆さになっているのかァ・・・
1階、学園の生徒・・・って着地が近い!!!
地面(グラウンド)・・・・・
茶色い　受け身・・・無理だ・・・
ぶつかる・・・・

「【百舌落とし】ッッ」
ッ
!!!!!!!!!!!
……

―――――――

「まさか相手が自ら得物を手放し、投げ技を仕掛けるとは思うまい……固定概念に囚われなかった川神に今回は軍配が上がったという事か」

そんなやりとりを烈としていると、決闘を終えた勝利者である一子が2人の元へ駆け寄ってきた

「テッちゃん、烈先生、ありがとうございますッ！　2人のおかげで私、勝つ事が出来ました！」

「その呼び方やめろって前から言ってるだろ一子。と、それよりも……ナイスファイト」

「あれは川神の実力で手に入れた勝利だ。我々がした事など、それほど重要視する必要はない」

「そんな事ないですよッ！　テッちゃ……じゃなくて鉄クンのアドバイスがなかったら、私あんな事思いつかなかっただろうし、もし先生が決闘前にリストバンドの重りを外すよう言ってくれなかったら、最初の突きでやられてたと思います！　この決闘で私、また一歩お姉様に近づけたような気がするわッ！」

――――本当にありがとうございましたッッ！

嬉しそうに笑いながらそう言うと、一子は２人に深く頭を下げた

そして後ろから呼ぶ仲間達の声を聞き、失礼しますッともう一度お辞儀をすると一子は皆の所へと戻って行った

「ヘェ……なるほどね」

「ん？　どうした私の顔など見て」

「最初、一子に対してあんな事言ってたのに、わざわざ重りを外すように言った烈先生は結局、一子の事を応援してたんですね」

「……私は言ったはずだ、彼女の努力は称賛に値すると。ならばその努力の成果、実戦で実らなければ何の意味も持たん……そう考えたまでだ」

「……俺、前々から先生に言おうと思ってたんですけどね」

「ん……」

「アンタさ、ほんっ……と優しいのな」

顔が瞬く間にカァ…と赤なり、それを隠すように烈は顔を背けてしまう

「決闘は終わった、さっさと教室に行くんだッ」

顔を見る事なく言う烈に思わず苦笑しながらも琢磨は指示に従って教室に戻る事にした

～その強さ、誰の為に～

朝の大半を決闘の時間に割きはしたものの、その後に大きな変化がある事もなくいつも通りの授業を終えた川神学園。いつものように帰りのＨＲを終え、部活動に所属している生徒達は各自の活動場所へと足を運ぶ。文武両道を重んじているここ川神学園は敷地面積が広いだけあり、単なる運動部の部室や用具室だけでなく武道を学ぶための施設も充実している

弓道場もその中の１つであり、今日も弓道部員達は練習に励んでいた。その空間は他の運動部とは一変して静寂なる空気が支配し、たまに弓が矢をを射た後の弦の震える音と、弓から放たれた矢が的を射る音だけが場内に鳴り響く

そんな中、弓道場の脇にある長椅子に腰を掛け休憩している部員が１名……彼女の名は『椎名　京』

京は弓道部に所属しているものの、あまり熱心に顔を出す部員ではない。むしろこうして弓道場にいる事自体が逆に稀なぐらいの幽霊部員である。しかし彼女の家系は椎名流弓術という優れた弓使いという事もあり、京自身幼い頃からその技術を父親から受

け継いできた。そんな京の存在が他の部員達の刺激になればと、クラスの担任でもある顧問の小島梅子に入部を求められ、京は条件付きではあるが形式上の入部をしたのである

だが、何故京はこうも弓道部の活動に消極的なのか？

それは彼女が元々人付き合いの悪い性格をしている事も原因の1つだが、実はもう1つ大きな要因が存在する

弓術と弓道……武術と武道の間にある壁の存在だ

心身の鍛錬を目的とした『礼射系』の弓道。その他の剣道や柔道など一般人が習う武道全般は、こうした礼を重んじる儀礼・儀式的な要素が加味されてた上で行われる意味合いが強い

一方、戦場での実利を重視し戦う為に築き上げられ、発展した『武射系』の弓術。こうした古来から続く武術の流派は今でも数多く存在し続けており、現代に広く普及されている武道と共存しながら自分達の流派を守り続けている。京が父親から継承した椎名流弓術も分類上こちらに入る

その自分と他の部員達との大きな隔たりがある為、京は余計に部活に出たがらないの

だ

「ふぅ……」

そんな京ではあるが、弓の実力は当然一級品。その証拠につい先程まで彼女が矢を放っていた的には矢が一本、ど真ん中に刺さったままであった。その周りには他の矢が刺さった後さえも見られなかったが、的の周りに散乱している縦に割られた数十本にもなる矢の破片が彼女の驚異的な集中力と命中精度の高さを物語っている

「よう、お疲れ。精が出るな」

他の部員達の矢を撃つ姿をぼんやりと眺めていた京は背後からそう声を掛けられ、思わず身を竦ませてしまう。普段から存在感を消して周囲に溶け込むのを得意とする京がこうも簡単に背後からの接近を許す事はない。京が少し慌てて振り返ると、そこにいたのは鉄　琢磨だった

「鉄先輩……ども」

自分を出し抜く程の人物であった事に納得のいった京は表情を動かさぬまま、言葉少なく琢磨に視線を向ける。風間ファミリーを除く唯一の友達でもある小雪を通して一応琢磨とは面識があり、京がファミリー以外で会話を交わせる数少ない男子でもあった

「よく来たな。弓子が最近部活に顔を出してくれないって嘆いてたぜ？」
「腕が鈍るといけませんので……先輩はどうしてですか？」
「別に弓道を習いに来てるんじゃないんだぜ？　ちょいと小島先生に用があってな」
「梅先生なら今日は職員会議に出てまだ来ていませんが……」
「そのようだな。んじゃ、少しここで待たせて貰うとするか」

琢磨は１つ間を空けて京の横に座る。そしておもむろに取り出したジュースの缶を１つ京に手渡す

「……『天帝ハバネロカイザードリンク』」
「当たり付きの自販機で買ったらそれが当たったんだが、確か椎名はそういうの好きだよな？　まだ空けてないから飲んでくれや」

「せっかく当てたんだし、いい機会だから先輩飲んでみれば？」
「俺は劇物を身体に取り入れる趣味はない」
「辛党仲間が一向に増えない……。こんなに赤いのに、鉄先輩はいらないと言う…」

残念そうな顔を浮かべながら京は缶の蓋を空けると、躊躇なく真っ赤な色をした液体を飲み始めた。京は大の辛党であり彼女は食べる料理を全て激辛に味付けしてしまう。さらに京は一応料理が出来るため弁当も持参してくるが、その弁当の白いご飯にさえ粉末唐辛子を振りかけて真っ赤な赤飯にする程である。因みに、今彼女が飲んでいるドリンク……一般人が飲むと半日以上に渡って舌の感覚が麻痺する程の激辛だ

「あ、そうだ椎名。1つ聞いておきたかった事があるんだが、お前以外の『天下五弓』にカウントされている残り4人について、何か知っていることがあれば教えてくれないか？」
「それは別に構いませんけど、随分情報が早いですね。まだ正式に公表すらされていない筈なのに……」
「俺がいつも世話になっている人で、常に世界中の格闘技者や武道家の情報が頭ん中に入っているジッちゃんがいてな。俺もその人から聞いて初めてその存在を知ったんだ。

まぁ、そのジッちゃんでも今のところ分かっていたのは椎名流弓術継承者　椎名京――
――お前1人のみ」
「どうも、天下五弓です。えへん」
「しかし、弓道部の幽霊部員がそんな大層な肩書を持っているとはな……意外に世間は狭いとはよく言うが、全然知らなかったぞ」
「私はそういう呼称、別に興味ないので……しょーもない」
「おいおい、せっかく名誉ある称号に冠したというのにその口振り……なら、お前の弓術は一体何の為にある？」
「そりゃあモチロン……カッコイイ彼氏のためさッッ」

京は両手で頬を挟みつつ、照れたような表情を作ってそう言い切った。彼女の言う彼氏というのは直江大和の事を指している。一応付け加えておくが京と大和は恋人同士……という訳ではない。大和は京が子供の頃からずっと一途に思い続けている相手であり、京にとって大和はこの世の何よりも大事な存在であった

「……ッは　何が出てくるかと思いきや……男かよ。惚れた男の前で――――――
『ダーリン私、強いでしょ』ってかッ……？」

皮肉った笑みをこぼす琢磨を余所に、京はどこからともなく取り出したハンカチの匂いを自分の顔をうずめるように嗅いでいた

「ハァ～……なんて刺激的な香りッッ」

「フ、愛しの彼氏から貰ったプレゼントか……」

「ううん、これは川神市内にある普通のお店で買った普通のハンカチだよ」

「ただのハンカチ……だと？　ど、どうしてそんなものをお前は嗅いでいる？」

琢磨はひどく困惑した

彼女の嗅いでいるハンカチはてっきり大和からの貰い物だと思っていたからである。

そんな京は琢磨の疑問に答えるように語り出した

「大和が生まれてからずっと住んでいる川神（ここ）にこのハンカチーフがあったというだけで……私はここに大和を感じることができる。それほどまでに、私は大和を愛している……それほどまでに、大和はカッッコイイんだこれがッッッ」

「いや、それならアイツでも流石にハンカチぐらいなら……」

「そんなバカを言っちゃいけない……大和が使っていたものなんて、私には刺激が強す

ぎてッッ」
「ワケがワかんねェ……片想いにしろ、直江の事好きなんだろ？」
「無論そうだよ……私の大和への想い、話し始めたら季節が三度は巡る」

冗談とも本音とも捉えかねない京の言葉
しかし、その言葉に秘められし覚悟はまさしく本物だ
それは仮に琢磨が直江を殺そうと動いたならば、京も間違いなくそれを阻止する、もしくはその為に殺す覚悟を持って闘うことだろう。だとすれば……それも1つの武の在り方と言えるのかもしれない
たった1人の男を愛するために、護るために使われる武術……
「（戈を止めると書いて『武』――――つまりそれは争いを止めると解釈する。自分の腕を必要以上に磨こうとせず、戦う……人と関わることも避けているコイツが天下五弓に相応しいのかと思っていたが……なるほどね）」

椎名　京――――彼女もまた、正真正銘の武人
恋心を隠さず、断固たる形で揺るがぬ意志を見せ付ける京の姿を見て、彼女に対する自身の評価を改める事にした琢磨であった

――――――

彼がこうして足代わりになって動いているのは、現在患っている病を一刻にでも治してもらおうという思いがあってのことなのだが、どうにもあの人はジッとしているのが性に合わないようだ

「さて、小休憩(インターバル)も充分とった事だ。……続きといこうか?」

そう独り言を呟くと琢磨は明日の試合に備え鍛錬を再開し、再び架空の相手に対して拳を構えた

時刻は夜の7時。現在、琢磨は渋川寮の庭にいた。彼は毎週土日の休日はこちらで過ごす事にしている。着替えの予備は既にこちらの自室に置いてあり、その他諸々の必要な道具も揃っているので金曜日になると学校から直接渋川寮にやって来るのだ

――――――ッッ!

自分自身が作り上げた対戦者から繰り出される連撃。それは常人が見ればあまりの速さに両手足が消えてるようにもさえ見えるが、その実態は正拳、前蹴り、貫手、上段・

下段の回し蹴り等々……空手に見られる技が大半を占めていた
琢磨はその嵐のような拳足の打撃を躱し、弾き、受け流す。自分の身体に刷り込ませるかのように受けに徹底する時間がしばらく続いた……が

「――――――邪ッ」

顔を狙った正拳を崩れ落ちるようにギリギリで避けた際の体勢を利用した右ハイキックが顎に一閃。相手の空手家はそのまま地面に吸い込まれていくように倒れ、消滅した

「お～、凄いねタクマ」
「……まぁ、こんなものか」

縁側で大人しく見ていた小雪が琢磨に1人拍手を送った。彼女は琢磨の独闘で作り上げた敵を視認出来ており、こうして寮で鍛錬する姿をよく見学している。一戦一戦時間が掛かるため退屈ではないかと思ったこともあったが、それでも見ていたいと小雪に押し切られてしまい、今日もこうして彼女は見に来ている

「どうしたのタクマ、勝ったのに元気ないぞー？」

しばらく立ったまま考え事をしていた琢磨に小雪が少し腰を落として顔を覗き込む。そんな上目遣いの彼女に琢磨は小さく笑むと、何も言わずに頭を優しく撫でた

琢磨はここ最近、自分の強さに疑問を感じている

己の身体を一切甘やかす事無く鍛え、闘技場へと足を運んでは自分の前に立ち塞がる世界中の強者達と闘いに明け暮れる日々。身体能力、戦闘技術だけを見れば今の琢磨は間違いなく強さの壁を越えているはずだ

しかし、それでも拭い去る事の出来ないこの恐怖心

事の発端は去年――――２００８年の９月

世界中を激震させた中国武術史に残る未曾有の一大事件にまで遡る

―――――――――――――――――――――

修学旅行で琢磨達が中国に訪れたちょうどその年、中国では１００年に一度の大擂台賽が行われていた。学長とも交流があった中国武術省は特別枠として川神学園の生徒及び教師数名の出場を許可。鉄琢磨、花山薫、生徒会長、ルー・イー、そして川神百代。以下５名がその大会に参戦

そしてその当時、百代が戦った最後の相手こそ……前大擂台賽覇者――――『郭　海皇』その人であった

中国全土の烈も含めた海王達を統べる『海皇』の称号を持つ、中国武界の頂点に君臨する齢１４６の超武術家ＶＳ世界最強の武神と呼ばれた２０歳にも満たない日本の女子高生

『女、子供、年寄りなど体力の恵まれぬ者……力無き者達にこそ武術が必要なんじゃ。弱者に使えぬ武術など、いったい何の意味があるというのかね』

そんな言葉を残している郭海皇を襲ったのは、およそ彼を持ってしても武術と呼べるものではない『何か』だった

中国における気の概念を超越したビーム砲、気弾、両腕を纏う紅蓮の炎と絶対零度の冷気。弱者には到底使う事など出来ないであろう『川神流』の数々

それでもなお、武術の理合を極限に生かして百代と渡り合った郭海皇。最後には敗れそうになるも、武の真髄『擬態死』を用いて勝負を『引き分け』に持ち込んで決着。後に百代は事実上【川神海皇】の称号を得る事になった（本人は丁重にお断りしているが……）

その激闘を眼前で目撃していた琢磨に両者の物とは別の衝撃が身体を走る。自分が目指す『地上最強』の道において最大の障害となるだろう武神――――川神百代

彼女のいる場所がすでに自分とは全く別次元の所にいる事を認めざる負えなかった

いくら他の武道家に勝利しようが、自分で創り上げた彼女を相手にしようが、このままでは決して辿り着けないという確信があまりにも大きすぎる

今は闘う事が互いに禁じられてはいるものの、そんな彼女がもし敵に回ったら勝つ事がかなうのか？

（俺は……俺は……）

―――――――――――――――――――――――――――

「タ―クーマーッ！」
「ッ！……ユキ、どうした？」
「ハゲがご飯の時間だって……タクマ、ホントに大丈夫？」
「おぅ、心配かけて悪ィ……メシ、だったな。行こうぜ」

柄にもなく少しの間、物思いにふけていたようだ
普段から小雪の前では平静を装っている琢磨にしては珍しい
今日、京の覚悟を目の当たりにして自分なりに思うところがあったようだ

「ねぇ……タクマ」
「ん？」

少し先を歩いていた小雪が立ち止まり、こちらに振り向く

「何も恐がる事ないんだよ？　タクマは強いんだから。だからホラ、笑って笑ってッ」

自分の心を見透かしたかのような一言

あぁ……そうだ……そうだったな

――――勝算があるからやる、ないならやらない……俺の闘いは本来そういうものではなかったな

「……ハッ！　あったり前だろ!?　俺はお前達のリーダーなんだからなッッ！」

そして、俺は勝つんじゃない……負けないんだ

その為に俺は強くなるんだ

護る為に……止める為に

それでもいいよな……『武人』なんだからさ

～空手道・神心会～

【闘い】は太古より人類に刻まれた本能である
人類が人類になる以前から持っている行動原理の1つだ
生活の糧を得るために、他の生物と闘う
有利な環境を手にするために、他の集団と闘う
勝者はそれを手に入れ敗者は最悪の場合、命を落とす
だから、勝つために人は頭を使った
より合理的な戦略を考え、より効果的な武器を作る
時には、効率的な肉体の鍛錬に勤しんだりもした
そうして長きに渡り体系的に、あるいは経験的に積み重ねられた勝つ技術が『武術』と呼ばれ、やがて『格闘技』とも呼ばれるようになったのだ
ならば、その中でも一番優れた武術とはなんであろう？
一番強い格闘技――――地上最強の格闘技とは一体何だ？
長い年月をかけて多くの人に議論されているこの議題
様々な人が様々な説を述べており、話題が尽きる事はないだろう

そして、ここにも1人
一貫してこの説を唱える男がいた

――――空手最強説――――

『空手こそ地上最強の格闘技である！』

その男の言葉を信じ、集まった人の数……およそ１００万！
最強を目指す者達にとって、避けては通れぬもの……
それがこの地上最大、実戦派空手の格闘技団体――――神心会なのだッッ!!

――――――――――――――――――――――――――――

とある川神市内の大きなビル
その建物内にある道場の中心に、空手の道着を着た1人の男が立っていた
道着の襟の後ろには太い字で館長の２文字が刻まれている

周りには長方形の木片を持った屈強そうな若い男が４人
中心にいる男は見たところ、歳は５０代だろうか
身長は１７０後半。ごく一般的な男性の背丈だろう
しかしその男の身体、間違いなく……太いッ
首・肩・腕・胸・腹・脚・手足の指にいたるまで太っているッッ
鍛えこまれた筋肉の造りがそうさせているのだ
その体重、うっすら脂肪を残し１１０キロ！
さらに取り分け人目を引くものが、その男にはある
毛髪が一本もない……俗に言うスキンヘッド
そして、右目を覆う黒い眼帯である

男の名は『愚地独歩』
この人物こそ、世界最大の勢力を誇る空手道団体・神心会の館長であり、創始者なのだッッ

「こ)オオオオオオオオ――――――」

足先を僅かに内側に向け、空手の呼吸法『息吹き』と共に顔の前で交差していた両腕を開いた独歩。その道場内に張り詰めた雰囲気は門下生だけでなく、見学に来ていた少年部の子供達にも伝わり皆、口を真一文字に閉じて彼を見つめている

「カッ!!!!!!!!」

その一声と同時に独歩が滑らかな動きで空手の構えをすると、瞬く間に周りの男らが持っていた木片を貫手で、手刀で、足刀で、最後は頭で見事に切断した。『折った』のではなく『斬った』のだ。当然、断面に接着剤などが塗られている訳もなく、独歩のもつ空手の技術がそれを可能としたのだ

「次ィ!!!!」

独歩の掛け声と共に門下生によって次に用意されたのはテーブル、そして大きな氷の塊である。キンキンに冷えてある氷からは水も滴っておらず、湯気ならぬ冷気が立っていた

独歩は氷の前に立つと壁とも言える氷の表面に拳を合わせる

「ぬんッ!!!!!」

一瞬の静寂の後、氷塊へ放たれた独歩の正拳

――――――ピシ…ッ　と

そこから始まる亀裂が氷全体を駆け抜け、独歩が構えを後ろに向けた時には、机から割れた氷の欠片が床へと崩れ落ちていた

「(や、やっぱスゲーな館長……あれから3年も経ってるってのに、全く衰えちゃいねぇぜ)」

門下生として演武を見ていた準は感嘆の息を吐いて独歩を見つめていた。比べても仕方ないのかもしれないが、やはりこうも実力の差を見せつけられると神心会空手の有段者である準も悔しくないと言えば嘘になる

そして独歩が演武の締めくくりとして用意したのは、２つのコンクリートブロックの間に架けられた1本の針金である

「(これは俺も初めて見る……針金切り)」

細い針金といえど紛れもない金属
曲げる事は容易くとも切るとなると話は全くの別物だ
皆の視線がより一層独歩に集まる中――――

「つッ!!!!!」

振り落とされた右の手刀によって小さな金属音を立てながら、針金は一刀両断された

「ハハ……挨拶としちゃまずまずってェところだな」

自身に贈られる拍手喝采に独歩はニンマリと笑顔で答える

「ヘェ～ッ、日本刀でもこうはいきませんよ。やっぱり館長も怪物だな」
「おだてるねィ、井上。そんなことしたって俺(おい)らからは何もでやしねェぜ?」
「イヤイヤ……そういう意味で言ったんじゃないんですけどね。久々に館長が支部に来

てくれたと思ったら、こうもアッサリ演武を生で見せてくれるとは思いもしなかったもので……」
「なァに、せっかく少年部のガキ共も見てるんでェ。このスーパードッポちゃんのカッコいい所を見せてェじゃねェか」
「まァ館長の事だから、そう言うとは思いましたケド……実際は違いますよね？」
「おうよ、まァアレだ……ただのケジメだよ。なんせ神心会館は地上最強をうたっちまッてんだ……ヤられっぱなしってワケにゃいくめェよ井上。エエ？」
「確かにそうですが……だからって館長がッ……」
「あ、あの！……館長、少しお話よろしいですか……オス」

２人の会話へ入って来たのは、少年部に所属している小学生低学年くらいの小さな女の子だった

「おう、どうした嬢ちゃん？　俺らに質問か？」
「オス、あの……さっき見してくれたのって……空手、なんですよね？」

大きな体格で見下ろす独歩に動じず、少女は聞きたい事を口にした。少女を含めた子

供達からしてみれば先程の演武で独歩が行ったことが現実離れし過ぎており、あれは自分達がしている空手ではなく、ただ独歩の馬鹿力でなした力技ではないのか……と疑問に思ったのであろう

「ハハ、当然空手だわな。見た通り空手ってのは手足を武器化することにある。気の遠くなる程の永い時間をかけ、嬢ちゃんの想像を超える執念をもって鍛錬の日々を経るんだ。そうして手足はやがて【鈍器】と化し……さらに切れ味を帯びて、遂には【刃】と化す。　武器なんざァ用意しねェ……手に何も持たぬことを旨とする道――――――だから空手って言うンでェ」

……って、嬢ちゃんにはチョット難しすぎたか？　と、最後に言うと独歩は女の子の頭をワシャワシャと撫でた

「なんとなくですけど、分かりました……オス。　なら私でも……館長みたいに強くなれますか？」

「おうよ、女・子供でも大の男にケンカで勝ち得る――――――これがそもそもの空手術だ。そのうちお嬢ちゃんもソコにいる坊主なんざビッシィーーーッとやっつけちまう

かもなァ？」
「だな。そもそも俺は小さな女の子相手には手も足も出ないっての。幼女は手折るものじゃねェ……愛でるものだからなッ」
「こら井上、邪念をこじらせるンじゃァ……ないッ！」
「あべしッ!?」

　ベチッッ、と女の子の耳にも届く程の強烈なデコピンの一撃を独歩からもらった準は額を抑え、地面にのたうち回る

「少しは自重しろやおめェさんはよォ……」
「す、スゴイ……川神支部で２番目に強い井上さんをデコピンで……」
「どうでェ、親指で逆立ちしたまま道場をグルリ一周……そんな指の力でやれば痛ェだろうよ。ましてやその握力で拳ィ固め……ブッ叩くッッ」

　片膝をつき、起き上がろうとしていた準に向けて独歩は正拳突きを寸止めした

「……ッッ」

「人間なら無論一パツ、正確に急所を射抜きゃ牛だってイケるぜ?」

独歩の拳を間近で見た女の子は思わず生唾を飲み込む

『見た』と言うと語弊があるかもしれない。彼女は井上の前で止まった拳を見ただけで、正拳突きの動作は見えていなかった

「か、館長ォッ!」

と、そこへ大急ぎで駆けつけたのは同じく神心会門下生の寺田である。顔から汗を大量に噴き出しており、呼吸も少し荒い

「どうしたってェんだ? そんなに慌ててよう」

「そ、それが……本部の人間だと名乗る男が急に道場の使用許可を求めてきて……」

「どうも、邪魔するぜェ。押ゥ忍ッ!」

道場の入り口からズカズカと中に入ってきたのは、空手着に身を包んだ加藤清澄だった

「あ～……もうそんな時間だったな、確か」

道場の壁に掛けてある時計を眺め、井上が呟く

「愚地館長、3年振りの再会ツスね。ごぶさたァ……」
「加藤ッッッ……オマエ、今までどこ行っとった？」
「日本各地の支部で空手を磨いてたンスけどね……今日はチョット懲らしめる奴がいてよォ。悪いが少しの間、道場貸してもらえませんかね？」
「なるほどね……あいかわらず好きだなァ、オメェも。井上、琢磨に加藤が到着したと伝えてこいッ！」
「押忍ッ」

準は道場を出ると、すぐさま上の階へと走っていった

「ヘェ、逃げずに来たのか……いい度胸してるじゃねェかアイツ。館長も見ていくかオレの空手？　すぐ終わらせてやるからよッッ」

「加藤、ケンカするのは構わねェが……組織を背負っとるなどと、大それたことは考えんでもよい」
「……はァ？　そいつァ、どういう意味なンだい？」
「立ち会えばワカる……琢磨は邪心をもって勝てる相手じゃねェって事がな。妙な功名心に囚われると、頭っから喰われるぞ」

それだけ言い終えると、独歩は他の門下生を集めて試合の準備に取り掛かるよう指示を出し始めた

「お、面白ェ……上等だぜェッッ!!」

持っていたペットボトルを放り投げ、上段蹴りで木端微塵にしながら加藤は気合を入れる。それは、まるで雄叫びをあげる獰猛な『獅子』を彷彿とさせた

今、【神心会のデンジャラスライオン】と呼ばれた男が琢磨に牙を向くッッ

――――――――――――――――――――――――

その頃、琢磨は独歩らがいる第一道場の上の階にあたる第二道場にいた。加藤がやって来る2時間以上も前に到着していた彼はここで朝の鍛錬をしていたのだ
現在は親指で支えたまま、逆立ちの姿勢でヨチヨチと道場の隅を回っている。そして、同じように親指の逆立ちをしていた『源　忠勝』を抜き去った

「オッシッッ！……これで、一周抜かし、達成だな、タツ？」
「チッ……10周まで、あと2周だって、のに……クソ！」
「オイ、負けたからって、最後までやりきれよ？　んで、昼飯は、お前の手料理……な？」
「あぁ……分かってる。どうせ、親父も……食うんだ、大した手間でも……ねェしよ！」

ぱっと見は近寄りがたく、ぶっきらぼうな言動が目立つ忠勝だが、何だかんだ言いながらもこうして琢磨と一緒に鍛錬しているあたり2人の仲は良く、そして心根は良い奴である
その後、2人が周回をし終えて床に座り込む
全身、汗でびっしょりである。既に床は2人の汗で水浸し……いや、汗浸し状態だった

「ッたく……少し、呑気過ぎや……しないか？　これからあの、加藤清澄と試合するのに、よ……」
「呑気？　そうでも、ないさ……。なんせ、隣には……虎殺しの息子が、いるんだからなァ？」
「ハッ……とんだ、買い被りだな。俺はただの、出来の悪い……空手家だ」
「……」

――――――――や、闘（や）りてエッッ!!
俺には分かるッッ
こいつの強さ……加藤の比じゃない事ぐらいッッ
花山を抜いて、同年代の男にコイツ並の強ェ奴ァ……俺は知らねェッッ
出来る事なら……俺はお前と闘ってみたいッッ
コイツの空手、受けてみたいとさえ思っているッ
そして、今すぐコイツにッ……拳を打ち込みてエッッ

「テツ、落ちつけ」
「え……ッ」

「試合を前に高ぶり過ぎだ。俺に対する殺気が漏れてるぜ？」

――――――――俺以上にな

「押ー忍ッ　邪魔するぜェ。　ボス、とうとうあの男が来たぜ！」

階段を駆け上がり、第二道場に到着した準が琢磨に加藤到着の報を伝えたのは、ちょうどそんな時であった

～予感～

門下生が見守る中、中央に引かれた2本の開始線に立つ2人の男
鉄　琢磨と加藤清澄の模範試合が行われようとしていた
神心会では今回のように他の流派の選手と手合わせをする事自体は大して珍しくない。実際、神心会が主催で開かれる大会では空手家だけでなくムエタイやテコンドー、日本拳法の選手達が出場した事が過去に何度もあり、その度に神心会は彼等をことごとく打ち破ってきた
それは加藤にしてみても、同じことが言える
愚地独歩の強さに憧れて神心会に入門。長く、苛酷な稽古に堪え、着実に実力を身につけていった彼も今では神心会を代表する空手家へと成長を遂げた
ここ数年は更なる強さを求め本部を離れ、日本各地を転戦
あらゆる格闘技との戦いで己の空手に磨きをかけ続ける日々
そんな彼の耳に『地下闘技場』に君臨する最年少格闘王者の噂が入ってくるのは、もはや必然であったと言えよう

「フ……フフッ」

今、『狂犬』加藤は歓喜していた
あっという間に最年少チャンプとの一戦を実現させてしまった自身の幸運
そしておそらくはーーーー否
間違いなく彼から最強の称号を手に入れるであろう自分に

だが、加藤はこの後思い知らされることになる
独歩の言わんとしていた事の本当の意味を……

ーーー

でもな、違うんだよなこれが
ホラ、俺らみたいな選手はさ
ここで蹴りを当てて怯んだところに拳を……って
多少頭の中でぼんやりとシュミレーションすると思うんだよ
そりゃ何も考えずに突っ込んでいく馬鹿は神心会（ウチら）にはいないだろうね
けどよ、あの琢磨とかいうヤツは違ったんだ
何がって……出来ないんだよ。イメージが
どこからどう攻めようと模索しても
アイツの身体に当てるイメージそのものがッッ
多分、他の連中も同じ事を思ってたと思うぜ
え、加藤センパイ？
理解（わか）ってただろうね
あの人も出られなかったよ……前に
琢磨？
動かなかったな……そう、一歩もだ
加藤センパイ困っただろうな
後輩だけじゃなく館長も見てるんだぜ？

当然、こっちから仕掛けるしかないでしょう

「チェイやッッッ」

だいたい1分半位かな
加藤センパイが立てた戦略
……いや、流石だったよ
【後廻し蹴り】
ありゃ完全に一撃で決めにいってたね
素人じゃとてもじゃないが避けられないからな
俺も出来るならそうしてた筈さ

「ヘッ……」

まぁ……その通りなんだがな
止めない俺達も悪かったと思うぜ

けど、そもそも売るべきじゃなかったんだよ
最初からアイツにケンカなんて……

――――――――――――――――――――――――――――

「随分とエゲツねェじゃないか……琢磨」

加藤との試合後、川神支部のビル内にある応接室に呼び出した琢磨に対し、独歩の告げた第一声がそれだった

「エゲツないって……独歩さんもあぁなる事ぐらいだいたい予想はついたでしょう?」
「そうじゃねェ……問題はそこじゃねェ。今更、加藤相手に腕を振るうレベルじゃないハズだろオマエさんは。タチが悪ィにもほどがあるだろよ」

繰り出した後廻し蹴りをスレスレで交わしながら放った琢磨のカウンター気味の拳は顔面を的確に捉え、その勢いのまま床に叩きつけられた加藤。試合はそのまま決着となり、加藤は担架で医務室へと直行した

「眼の前にいる相手の戦力を瞬時に見抜く才能ーーーーあの時の加藤さんにはそれがなかった。だから身をもって教えてあげたのさ……それは時として力の強さ以上に重要な事ですから」

違いますか?と尋ねた琢磨の言葉に独歩が頭を掻く

「間違っちゃあいねェな……『驕れる神心会久しからずや』ってか」

やれやれと肩を落としながら独歩は道着のまま机に腰掛ける

「まァいずれにしても、加藤の一件だけでここに用があった訳じゃあるめェ……本当の目的は俺だろ?」

「……何でもお見通しだもんな～独歩さんは」

そう言いながら、琢磨も近くのソファーに座る

「長期間、第一線を退いていた貴方が現役復帰……忠勝から聞きました。ホント、お元気そうで何よりです」
「ったくよォ……お前さんも忠勝も俺を年寄り扱いし過ぎだ。まだまだ自分のケツは自分で拭くってェのによ」
「独歩さんなら確かに拭くでしょうね」

頭の中で想像してしまった琢磨は思わず苦笑してしまう

「けど、復帰して早々川神(こっち)に来たって事は……ついにその時が近いって訳だ」
「オウよ、こちとら目ン玉1つ奪われちまってんだ……このまま引き下がれるかよ」
「大丈夫なんですか？　流石に数年のブランクは大きいと思いますし、一応言っときますけど……既にあの人、師範代を剥奪されて川神院にいませんよ？」

1度闘いが始まれば誰にも止める事が出来ず、下手をすればかなり危険な命のやり取りになる……と独歩ならその意味を汲み取るだろうと琢磨はあえて自ら口にしなかった

「んなこたァ知ってるぜとっくに。いいじゃねぇか……それが本来の実戦ってもんだろ。オイラの事も心配いらねェ」

なんならよォ……と独歩が腰掛けながら琢磨に向けて人差し指をクイクイっと動かす

「せっかく会いに来てくれたんだ……オイラとチョットだけ手合わせしてみるか？」

さっきまでの雰囲気とは一変し、独歩がカエルを睨み付けるような蛇の視線で琢磨を真っ直ぐ睨み付ける。琢磨は知っている。愚地独歩という男は決して冗談半分で勝負を吹っ掛けるような人ではないという事を……

「よく考えたらよォ、おかしな事だぜ。知り合ってからけっこう経ってるのに……お互い最強を目指す者同士なのに……1度も立ち合った事がない」

「勝てる相手としか喧嘩はしない……これも武道家にとっては大切なことです。昔の自分は正にそれですよ」
「なら、今はどうでェ？　な？チョットだけ……」

琢磨も独歩から視線を逸らさなかった。いや、逸らせなかった
その瞬間、間違いなく独歩の蹴りが飛んでくるだろう
突然の喧嘩勧誘に戸惑いながら琢磨がソファーから立ち上がる

「まったく……独歩さん、あんたズルいよ。滅多に使わないであろう応接室にわざわざ呼び出して……今の俺の立場を知っていながらそんな事を言うなんて……」
「あ～悪イ悪イ、困らせちまったな。ここでオイラに手ェ出したら門下生の連中が生きて帰さんだろうし……ま、オイラなら断るだ（ｒｙ」

ーーーー断れるハズないでしょうッッ

刹那、背中から腕にかけての筋肉の駆動、加速を終えた琢磨の右の打拳が独歩の顔目掛けて疾る。加藤を屠ったあの拳よりも何倍も早く、鋭いまさに渾身の一撃

さぁ、この拳ーーーーー
どう捌く愚地独歩ッッ
!!!
動かない⁉？
俺の拳が真ッ直ぐ入ッッ……
空を切ーーー
なッ‼??
伝わるはずの手応えを感じられない琢磨の視界に独歩の顔が接近する
顔近ッ……ていうか
スカされたッッ
まずい、反撃がーーー来るッ
後ろへ……跳ッ
ーーージャリ
直後、振り上げた独歩の掌底が琢磨の左頬を僅かに削り取った

クッ、右の掌底か……
頬の薄皮一枚分ッ
鼻や耳であれば
確実に削ぎ落とされる‼?
何はともあれ
間合いを開けーーー
ッッ!
後ろへ下がった琢磨だったが、独歩との距離が一向に離れない
詰められたッッ
間合い……
完全に射程内ーーー
追撃の前蹴りッッ
狙いは水月ッッ
回避をッッ
右か⁉?　左か⁉?
だ、駄目だ……
どっちに動いても

躱しきれんッッ
「ガハッ……!!?」
両腕で腹をガードした琢磨の全身に独歩の丸太のような右足の衝撃が伝わる

すッ　凄いッッ
防御(うけ)は成功ーーーだが
何という重たい一撃……
こ、これ以上は……
体勢をッ　右へッッ!!?
先読み!!?
いや、ほぼ同時かーーー
なんて反応速度ッ
ここは1度、脚へ一撃を当てーー
琢磨が左足のローで独歩の動きを封じに掛かるが……
と、跳んだ!!?
１００キロはあるであろうこの体格で……

こうも軽々とッッ
いや、これは逆に好機(チャンス)ッ
如何なる武闘家でも、着地までは無防備
右のハイキック　こめかみへッッ
ッ!!?
腕を頭に
防御の構え
また読まれたかッッ
攻撃を中断し、独歩が着地する間に距離をとる
ーーーーーなんという怪物ッッ
恐るべし……愚地独歩ッッ

時間にしてみれば、ほんの数十秒に満たない間の攻防
琢磨の頬から血が顎へと伝わる

「ひでェじゃねえか琢磨……数年のブランクがあるオイラに不意打ちかよ?」

「武道家は日常臨戦態勢にあるべき……俺が昔から世話になってる人が掲げる信念だ。それに相手はかの『人喰い愚地』ーーーそんな貴方に不意打ちを仕掛ける事に、一切の罪悪感無しッッ」
「武の本質は鮮やかに敵を仕留めることじゃねェ、たとえみっともなくとも勝つこと……ナルホドねェ、上出来だ」

そう言うと独歩は唇を歪めて笑みの形を作る
会話を続けるものの、琢磨との闘いを収める気がないのは、彼の戦意と闘気を見れば一目瞭然だった

「まァ何れにしろ、このまま引き下がるワケにゃいかねぇな……」
「予定にはなかったんだけどなぁ。これはこれは……願ってもないッ」

２人の目に好戦的な光が宿り、互いに拳を構える

ドンッ!!?ドンッ!!?

そんな時、誰かが部屋のドアをノックする
「俺だ、入るぞ！」
ドアを開けて入ってきたのは忠勝だった
手には丼物の器と湯呑みを載せたお盆を持っている

「なんでェ忠勝。どうしたってんだ？」
「親父ィ、客人に茶ぐらい出してやれよ！」
「……あー、わざわざ用意してくれたのか。すまねェな」
「勘違いすんなよ、神心会がロクに客をもてなす事が出来ねェなんて思われるのが面倒なだけだ」

相変わらず安定のツンデレぶりを発揮する忠勝である

「あとはホラ、ちょうど昼飯時だ。蕎麦茹でたから食っとけ」
「おぉ！　蕎麦まで準備してくれたのか？　サンキューなタツ！」
「お袋が送ってきてくれたが一人じゃ食い切れねェだけだ。別にお前の為に用意したつもりはねェ」

「いやー独歩さん、よく出来た息子さんですねぇ」
「だろォ？　オイラと夏恵の自慢の息子よ」
「ハッ、何言ってんだ気色悪ィ……さっさと蕎麦が伸びないうちに食っちまえよ。もし、食い物を粗末にするような真似したら……テメーら2人まとめてブッ倒すからな！」
しかめっ面のまま、忠勝はそそくさと部屋から出て行った

「……」
「……」

机に置かれた2人前の蕎麦を見つめる独歩と琢磨
琢磨のキズは既にアドレナリンによって止血されている
しかし、忠勝の勢いに圧倒されて闘いを再開する気になれない

「……蕎麦、伸びちゃいますね」
「その前に冷めちまうぜ……冷める前に決着もしそうにねェな」
「蕎麦……食べますか」
「だな。不本意だが、こればかりは流石に…な」

独歩もどうやら同じ考えだったようだ
２人向かい合って座り、熱々の蕎麦を頂く事にする

「しかし、認めざる負えないですね。　神の拳……ここに復活といったところですか」
「完全とまでにはいかねェがな……ベストまでは７割ってところか」

ーーーーーハッタリじゃない……この人が言うのなら

ズズッ……ッ‼?
「うンめェ～～～ッ　この蕎麦、メチャクチャ美味しいですね⁉?」
「当たりめぇだ。誰が打った蕎麦だと思ってやがる」

こうして暫くの間、室内には男２人の蕎麦をすする音だけが響いていた

～格闘士のとある休日～

太陽の光がゆっくりと東の空を青く照らし
どこか遠くの方でホーホケキョと鶯(ウグイス)の囀りが聞こえるような時間。日曜日のこんな朝の時間帯に起きている人など、生放送の報道番組に出演するニュースキャスターや川神院の修行僧ぐらいなものであろう
昨日、神心会の鍛練に1日参加した琢磨もそれは例外ではない。小さな寝息を立てながら、彼は現在も布団の中にいた
日曜日は琢磨にとって身体を労わる大事な日であり、今日一日は激しいトレーニングを控え、先週の日曜から今日まで酷使し、傷ついた筋組織の修復に徹底している。因みに平日のこの時間の琢磨であれば既に起床し、鍛練を始めて汗を流している時間だ
無論、格闘士であり武道家でもある彼の常日頃が実戦である事に変わりはなく、仮に今この瞬間を襲撃されて負けるような事があったとしても、全ての責任は琢磨個人にあり言い分など通用しない
かと言って、この寮がそう簡単に侵入出来るようでは他の学生達にも危険が及びかねない。当然、木造建築ではあるが最新の防犯セキュリティーシステムによって不審者を

発見次第、直ぐに情報と映像が警察に送られるようになっている
このような監視設備が施されているのも、一概に寮主が警視庁で逮捕術を指導しているからといえよう

だが……

「ハイイイィィッッッ」
「オワッッ⁉?」

誰もその寮主本人がまさか襲撃を決行するとは思いもしないだろう……
琢磨は持ち前の反射神経で掛け布団を跳ね除け、身を翻して足刀を躱す。全体重を掛けて頭の真上から蹴り落とされた足が枕を突き破り、中から詰めてあった小豆が室内にバラバラと散乱する
「ホ〜〜ホッホッ、かろうじて間に合ったようじゃな」

琢磨が安堵するなか、目の前には鼈甲(べっこう)の眼鏡をかけた老人がどこか満足気に笑ってい

た

その顔には幾つもの深いシワが出来ており、頭髪も天辺の黒髪を残して横周りには白髪が生えている

和服に袴を穿いた老人の体格は女の娘並と言って差し支えがないであろう

実際の身長は１５５センチ　体重は４７キロ　齢７５歳ともなればごく一般的な老体だ。事実、冬馬や準は元より小雪と比べてもなお小柄で痩せ細っている

だが、この少年のように小さな老人から感じるものは全くの別物。分かりやすく言うとかなりヤバイ……それもとんでもなく

弱々しい皮に包まれてるがそれは外見だけ

１枚めくれば其処にあるのは凶暴な武の塊

才能は無論、現状の強さも常人を遥かに凌駕する絶対強者がここに存在している

老人の隙は皆無。素人が迂闊に間合いに入ろうものなら間違いなく地に伏されるだろう。見た目とは裏腹の攻撃性こそがこの老人の本懐だ

その正体は現代に生きる伝説の達人

名を『渋川剛気』

曰くーーーー小さな巨人
曰くーーーー実力Ｎｏ．１
曰くーーーー武の体現
渋川流柔術の開祖にして合気を完全に極め、『近代武道の最高峰』と称えられた人物であった

「起こすならもっとマシな起こし方して下さいよ……剛気さん」
「なァ～に若いモンが言っとる、よく目が覚めたじゃろ？」
「まぁ、確かに覚めましたけどね……まぁいいです。で、何か用ですか？　こんな朝早くから」
「いやなに、儂はただクッキーに頼まれて起こしに来ただけじゃ。お主に頼み事があるみたいじゃが……ま、詳しいことは本人に聞くことじゃな」

　では儂はもう行くぞ、と寝込みを襲ったにも関わらず日課である朝の散歩に出掛ける為、何食わぬ顔でトコトコと部屋を後にした渋川。散らかすだけ散らかして立ち去る彼への言葉を押し殺し、琢磨は小豆をかき集める

「あ、渋川さん。散歩から戻ってくる頃には朝食の準備が出来ると思うから、渋川さんも一緒にいかがですか？」
「ほォ、そうかい……なら遠慮なくお邪魔させてもらおうかの。礼を言うぞクッキーや」

廊下で渋川と入れ違いになるように、今度は大きな卵のような形をした第一形態のクッキーが琢磨の部屋に顔を出す

「やぁ、おはようマイスター。この部屋の惨状を見る限り、またやられたみたいだね」
「と言うか、剛気さんが俺をまともに起こした事なんて一度もないっての。んで、日曜の朝からクッキーは俺に何を頼みたいんだ？」
「おっと、そうだったね。実は冷蔵庫の中の野菜類がちょっと不足気味でさ、朝食の分の野菜だけでもいいから買ってきてくれないかな？」
「……あー、なるほど。昨日は九鬼でのメンテナンスが1日中あったから、買い出しに行けなかったのかお前。なら仕方ないな……ランニングがてら俺がひとっ走り朝市で買ってきてやるよ」
「ホントにいいの？　ありがとうマイスター！」
「なぁに、いつも人一倍俺達の食事に気を遣ってくれているクッキーの他でもない頼み

だ。断る訳ないだろ？　１人でやるのが大変な時は俺達に任せておけって」
「マイスターは優しいねぇ……よーし、今日の朝はより一層腕に寄りをかけて皆に振る舞うよ！」

気分が高揚したのか、そう言うとクッキーはガシャンガシャンと音を立てながら丸いフォルムから人型の第二形態の姿に変形し、内臓されてあるビームサーベルを取り出した

「フフフ、腕の見せ所だな。マイスターが買ってきた新鮮な野菜を私の剣捌きでフレッシュサラダにして馳走するとしよう」
「まな板まで切りそうな勢いだな……捌くのは剣じゃなくて包丁だからな？　んじゃ、遅くならないうちに行ってくるぞ」
「ではよろしく頼む。部屋と布団は私が全力で片付けておこう」

着替えを終えた琢磨は両脇に段ボールの箱を抱え、颯爽と閑静な川神の朝へと繰り出した

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

暑過ぎず寒過ぎもしない、程よい心地よさ
多馬川の土手を爽やかな風が吹き抜ける

「寮までの道のりも後少し……朝食の時間には間に合いそうだな」

沢山の野菜が入っている段ボールの箱を両肩の上に抱えながら、琢磨はそんな場所を走っていた。せっかくなら美味しい野菜をと走り回った結果、彼は鎌倉野菜の朝市にまで足を運んでいたのだ。しかし走り続けているその顔に疲れの表情は一切見られない

「それにしても……朝の多馬川に吹く風は気持ちいいな～」

軽い足取りで渋川寮を目指す琢磨。だがその道中、ジャガイモが1つ段ボールからこぼれ落ち、コロコロと芝生の坂を転がってしまった。舗装されていない河川敷を走った事で僅かに揺れが生じたのだろう

ーーー時間的に余裕がある訳じゃないが、農家の人が丹精込めて作った野菜を粗末に

は出来ないな
焦る気持ちを抑え、一度段ボールをその場に降ろし、ジャガイモを拾いに河原へと降りる。周囲を見渡すも一目でジャガイモを見つける事が出来なかった。が、代わりに1人の女性が寝ていることに気付いた

「ん？　あの人は確か……」

彼女は琢磨が鍛錬で多馬川にいる時によく見かける見覚えのある顔であった
自分よりも少し大きな背丈であるが、可愛さもある綺麗な顔立ちで身体も身長に見合った抜群のプロポーション。青い長髪が風で揺れながらスヤスヤと彼女は眠っている
そして琢磨はもう1つ大事なことに気付く
探していたジャガイモがちょうど彼女の懐にある事を

「むぅ……さて、これはどうしたものか」

顔を知っているとはいえ殆ど赤の他人である2人

ジャガイモ一つ取る為に気持ち良さそうに寝ている彼女を起こすのは忍びない。かと言って彼女が起きるのを待っている猶予もない。クッキーや寮の皆が帰りを待っているだろう

「(仕方ない……ま、ただジャガイモを取るだけの簡単なお仕事だ)」

いけない事をしているような気が引ける思いを振り払い、琢磨はそっと手を伸ばす。彼女の体や腕に触らないように身を乗り出しジャガイモを手に取り、腕を引こうとする……が

「すう……すう……ン」

「……え？　うおッ!?」

彼女の腕が自分の服を掴んでいる事に気付いた時には既に身体を捕られ、琢磨は寝返りと同時に隣に寝転ぶように倒れてしまった

「(な、なんて引きの強さだ……柔道かレスリングでもやっているのかこの人は？)」

「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」

彼女の力に驚く琢磨を他所に本人は相変わらず起きる様子がない。よほど寝るのが好きなのだろう。今では抱き枕にするかのように琢磨と身体が密着している。

離れようと琢磨は動くものの、彼女のホールドは想像以上に強固でなかなか外れない。それに加え、彼女から伝わる包容力と安心感に思わず身体から力が抜けてしまう。そこにあるのは恥ずかしさよりも、どこか懐かしく忘れていた感覚であった

「Ｚｚｚ……ん……んん……んー」

「（あ、目が覚めた）」

暫くしてうっすらと瞼が開き、ゆっくりと目元をこする彼女。その行動一つ一つもスローペースであった

「……や」

「ど、どうも」

「急に抱き枕が出来たかと思ったら君だったんだ～」

起きた後も彼女は怒る事なく琢磨に笑みをこぼす

「君は時々ここで見かけるけど……今日は私とお昼寝しにきたの？」
「いや、俺はそこにあるジャガイモを拾いに来ただけでして……」
「ジャガイモ？……あぁ、これだね。ハイどうぞ」
「ありがとう……それにしても、どうしてこんな朝早くからここで昼寝を？」
「昨日はバイトが夜勤でさ～、眠くて眠くて家に帰るまで我慢出来なかったんだ」
「まだ朝は冷え込むからこんな時間に外で寝てたら風邪引くって。俺はもう行くけど……そろそろ帰らないと家の人が心配するぞ？」
「ん、そうだね……みんなの朝ご飯作らないといけないし、私もそうするよ」

彼女はその場に立ち上がり、大きく背伸びをした
琢磨も身体に付いた芝生を払い荷物を抱え直し、寮を目指し再び走り出す

「あ、そうだ……ちょっと待って～」
「っとと……な、何か？」

「君の名前、まだ聞いてなかったよね。なんて呼べばいいかな？」
「……琢磨、鉄　琢磨だ」
「琢磨クンかぁ～。私の名前は板垣辰子、また一緒にお昼寝しようね」

そう言いながら手を振った辰子は多馬川の土手をゆっくりと歩いて行った

「板垣……辰子？　確か親不孝通りで有名な不良も同じ板垣だったような……いや、たまたま同じ苗字なだけか」

そんな疑問を頭の片隅に追いやった琢磨は大急ぎで寮へと向かった

ーーー

「約束の時間まで３０分……これなら待たせずに済むか」

冬馬の助言を聞き、早めに寮を出た琢磨

今日は前に約束していた黛と一緒に携帯電話を購入する日である

友達になりはしたが黛が携帯を持っていなかったので、未だに連絡交換が出来ていない。当然、名刺を渡した花山にも連絡は来ていない

黛の友達１００人計画を遂行する上で今のご時世、携帯は必要不可欠なキーアイテムである。しかし、対人とのコミュニケーションが取れない黛が１人で買いに行ける訳もなく、今回は琢磨が同行する事になったのだ

「少し時間もあるし、自販機で何か買って……」

待ち合わせ場所に着き、そう言いかけた琢磨はすでにその場にいた黛の姿を見て、自分の失態に苦い表情を浮かべる。慌てて黛と合流した琢磨はすぐに頭を下げた

「悪い、待たせたようだな」

「そ、そんな……まだ約束の時間じゃないですから顔を上げて下さい」

「いや、それでも黛を待たせた事実に変わりはないだろ」

食堂の時も席に座らずに待っていた黛の事。間違いなく予定の時間より早く来るとは考え、冬馬からも待ち合わせの時間には注意するようにと言われていた琢磨だったが、その見積りが甘かったらしい

「一応聞くが、いつからここで待っていたんだ？」
「え、えーとですね……その……1時間前……です」
「……本当にすまない、俺が逆に３０分も待たせるなんて」
「そ、そんな、先輩は約束の時間を守っている訳ですし、ただ私が早く来てしまっただけですので……」
「まゆっちの言う通りだぜセンパイ。まゆっちてば昨日の夜から緊張して全然寝付けなくてさ～、今朝だって服選びや髪型のセッティングに何時も以上の気合い入れようだったぜ？　今のまゆっちは謝られるよりもそういう所に気付いて欲しいお年頃だとオラはーーー」
「な、何を言い出すのですか松風⁉？　私はあくまで友達になって下さった鉄先輩に対して失礼のないよう身だしなみを整えただけです！」

自分で自分をからかい、そして真っ赤になって照れる黛。そのシュールな光景を眺める歩行者の視線をヒシヒシと感じた琢磨は、彼女の為にもこの件に関して話を延ばすのはやめる事にした

「落ち着け黛、ならこの話はここまでにしよう。お互い予定より早く着いたんだし、時間は有意義に使おうぜ?」

「わ、分かりました。ふつつか者ですが、よろしくお願いします!」

「エスコートは任せたぜ鉄先輩。まゆっちにどこまで男を見せるのかお手並み拝見だな」

黛は畏まって頭を下げる。彼女が意識して作ったであろう笑顔は、やはりどこか強張っていた

『いい顔してるぜアイツ……武道をやらせとくにゃ惜しい女だぜ』

彼女の笑顔を見て、花山が言っていた言葉の説得力を改めて実感した琢磨であった